

タイトル	笠島一「北炭労働運動百年史の栄光と悲惨」 北海道炭鉱汽船(株)百年史編纂(三)
著者	大場，四千男；OHBA, Yoshio
引用	開発論集(88)：167-220
発行日	2011-09-01

笠島一「北炭労働運動百年史の栄光と悲慘」

北海道炭鉱汽船(株)百年史編纂(三)

大 場 四千男*

目 次

第一編 北炭新夕張炭鉱労働組合時代

一、新夕張鉱の沿革

- 1, 新夕張炭山の開坑と変遷：谷→石狩石炭（東京ガス）→北炭夕張鉱業所第三鉱→北炭新夕張炭鉱→閉山
- 2, 位置と地質
- 3, 生産のうつりかわり
(1)採炭 (2)運搬 (3)支保 (4)通気および排水 (5)選炭および坑外施設
- 4, 保安と重大災害
- 5, 出炭, 人員
(1)出炭の推移 (2)人員の推移
- 6, 技術者と管理体制

二、生活

- 1, 従業員と福祉
- 2, 福利・共済活動

三、労働組合

- (1)ストライキをやってから組合結成 (2)食糧確保, 民主化運動 (3)炭鉱労働戦線の結集
- (4)組織のうつりかわり (5)賃金および労働条件 (6)企業整備反対闘争と租鉱権設定反対
- (7)戦術とストライキ

四、終堀, 全員配転

五、残炭処理で新会社設立

六、むすび

- 1, 政策と災害に弱い炭鉱の体質が明らか
- 2, 人間関係のよいヤマであった
- 3, 古きよき時代の典形

第二編 北炭平和鉱労働組合時代

一、若鍋炭鉱の大爆発と閉山

- 1, 沿革：谷→石狩石炭（新夕張二坑, 三坑）→北炭（若鍋炭一坑の名称変更）→閉山
- 2, 位置と地質
- 3, 生産のうつりかわり
- 4, 大爆発の発生で北炭と合併

二、平和炭鉱の開坑と発展

- 1, 開坑の背景と名称

*（おおば よしお）開発研究所研究員, 北海学園大学経営学部教授

- 2, 位置, 地質, 炭層
- 三, 機械炭砦で生産増強
 - 1, 採炭の機械化と生産の足どり
 - 2, 運搬, 選炭のうつりかわり
 - (1)切羽運搬 (2)その他運搬 (3)選炭機と銘柄
 - 3, 出炭・人員・能率の推移
- 四, 縮小から閉山
 - 1, 1区終堀, 2区へ統合
 - 2, 坑内火災の発生
 - 3, 深部移行で条件悪化
 - 4, 閉山提案と新鉱移行準備
 - (1) 閉山提案 (2) 通産省調査団(IE)の調査 (3) 自走枠の導入 (4) 新標作の実施と山元ストライキ
 - (5) 閉山交渉と協定内容
- 五, 生活
 - 1, 福祉厚生
 - (1)住宅 (2)若菜市街 (3)賃金と生活 (4)医療 (5)冠婚・葬祭 (6)平和砦坑口神社 (7)葬儀 (8)結婚式
- 六, 閉山で新鉱移行
 - 1, 夕鉄労組との共闘
 - 2, 組, 下請労働者の条件闘争
 - 3, 新鉱構想の提案
- 七, むすび

第一編 北炭新夕張炭鉱労働組合時代

- 一, 新夕張砦の沿革
 - 1, 新夕張炭山の開坑と変遷: 谷→石狩石炭(東京ガス)→北炭夕張炭業所第三砦→北炭新夕張炭鉱→閉山
 - 2, 位置と地質
 - 3, 生産のうつりかわり
 - (1)採炭 (2)運搬 (3)支保 (4)通気および排水 (5)選炭および坑外施設
 - 4, 保安と重大災害
 - 5, 出炭, 人員
 - (1)出炭の推移 (2)人員の推移
 - 6, 技術者と管理体制
- 二, 生活
 - 1, 従業員と福祉
 - 2, 福利・共済活動
- 三, 労働組合
 - (1)ストライキをやってから組合結成 (2)食糧確保, 民主化運動 (3)炭鉱労働戦線の結集
 - (4)組織のうつりかわり (5)賃金および労働条件 (6)企業整備反対闘争と租鉱権設定反対
 - (7)戦術とストライキ
- 四, 終堀, 全員配転
- 五, 残炭処理で新会社設立
- 六, むすび
 - 1, 政策と災害に弱い炭鉱の体質が明らか
 - 2, 人間関係のよいヤマであった
 - 3, 古きよき時代の典形

一、新夕張砒の沿革

1、新夕張炭山の開坑と変遷

明治30年(1897年)落合藩之助が試掘許可(明治24年頃)を譲り受け12月頃採掘に着手した。このため、鹿の谷駅が新夕張炭山の石炭を積込むために12月1日開設する。

しかし規模は小さく、2～3人の手を経て明治35年、札幌の富豪谷七太郎の所有となり、付近16鉱区を合併して「谷新夕張炭山」の名称で本格的に採炭することになり、炭鉱として形態をととのえていった。

出炭は、明治36年に37,119トン、39年は122,044トンとふえていった。

同時にガス爆発などもふえ、特に明治39年5月22日に起ったガス爆発で3名が殉職する事故になったため、経営は一段と苦しくなり、単独経営は困難となった。

そこで新夕張、若鍋(平和鉱の部でくわしく述べる)両鉱を浅野総一郎と共同名義とし、39年10月から石狩石炭株式会社が経営にあたった。

43年6月には東京ガスに売却され、大正6年9月には三井鉱山と石狩石炭の共同名義に変更されたが経営は石狩石炭(株)がつづけていた(新夕張砒)。6年9月三井と共同名義に改めたが、大正9年1月北炭に合併された。同年7月に若菜辺砒は新夕張砒から独立し、新夕張砒は9月から夕張砒宇治坑(旧五番坑)を併合して運営された。

昭和7年から13年6月までは夕張砒傘下の新夕張担当となり、13年以降38年の終堀までは夕張鉱業所第三砒として運営された。終堀後の残炭整理には新夕張炭鉱株式会社があたり昭和47年4月18日閉山まで経営にあたった。

2、位置と地質

位置

夕張炭田中部にあり、夕張川の支流シホロカベツ川の東西にまたがり、北は夕張砒に接し、南は鹿の谷駅に近く、輸送は鹿の谷駅からの岐線熊の沢線約4^{メートル}米で行っている。又住宅街は、鹿の谷駅から夕張市街地の間に国鉄、道々札夕線を夾んで平坦地に広がり、稀に見る好個の鉱業地である。

主力は、松島坑、橋立坑、厳島坑で、地質構造的には天竜断層と若鍋断層の中間部に位置している。

この区域はわが国においても特異な褶曲および断層が発達して、複雑をきわめた地質構造を呈している。

このような特殊事象にもかかわらず採炭はきわめて合理的に進められてきた(北炭70年史)。

地質

地質は第三紀層に属し、頁岩及砂岩の累層より成る。

主要な稼行炭層は夕張砒の継続でその厚さ24尺(7.2m)あるも、2枚の夾雑物が漸次その

厚さを増大し、下方の夾雑物は3^{メートル}米にも達する。

6^{メートル}、8尺層（炭丈4^{メートル}米）、10尺層（炭丈2.7^{メートル}米）であるが、本層の上部約50^{メートル}米に上層（炭丈1^{メートル}米、1.5^{メートル}米）二層があり、厳島坑で採掘していたが昭和28年12月で廃坑となった。

本層は松島坑、橋立坑で採掘したが、37年に橋立、38年に終掘した。

引続き新会社（鉱員138名、出炭200トン）で旧坑の残炭処理を行ない47年7月に閉山した。

石炭の種類は、夕張と同じく粘結性瀝青炭で、水分1.51 揮発分43.19 固定炭素49.57 灰分5.73 窒素1.43 硫黄0.25 発熱量7,590 カロリーの分析表が示すとおりであり、我国では最も良質の石炭で戦前はほとんどが東京ガスに送炭していた。

3、生産のうつりかわり

(1) 採炭

開坑以来大正13年までは残柱式で採炭した。大正14年から無充填長壁式を採用した。当砦は、6尺層と8尺層の間に0.9^{メートル}米ぐらいの風化し易い白盤の夾^{ハサミ}があって、これが採炭の障害となっていたので、最初に6尺層から、次に8尺層を採掘する方法をとった。この場合、6尺層は問題はなかったが8尺層に移ると白盤が風化膨脹して脆弱になり、採炭につれて粉碎崩壊し、作業が困難であった。このため8尺層払いは一部の採掘にとどまり、大部分は放棄された。

つぎに8尺層から先に払う方法を試みた。この方法は8尺層採掘中にすでに白盤が剝落するので多くの支柱を要し、さらに後日6尺層を採掘する時に踏前が陥没しないように一面に空木積をしたので材料費がかさんだ。そのうえ6尺層を払う時には天盤が脆弱となる反面炭質がいちじるしく硬くなって採炭能率があがらない欠点があった。

3回目の方法は、8尺層の払いと同時に、6尺層を崩落させて拾炭する方法を試みた。

この方法は、前二度の欠点を除くために案出されたもので、支柱費は極端に節約され、採炭能率も向上したが、支柱のない5～6^{メートル}米の高い空洞内で、白盤混りの6尺層炭を選別搬出することは甚だ危険であったので間もなく中止された。

(1) 無充填＝階式ロング この方法は昭和3年9月から実施したもので8尺層から6尺層に昇をあげ8尺層と6尺層の間隔を4^{メートル}米に保ちながら平行して採炭する方法で、実収率は6尺層89%、8尺層83%となり、切羽能率は5トンになった。6・8尺層採掘後2～3ヶ月で10尺層を採掘した。然し無充填のために8尺層払の時は炭質が硬化し天井が高くなって、危険であり、また次の切羽の準備掘進に忙殺され、時々大崩落を起す欠点があった。

(2) 長壁式乾式局部充填法 この方法は昭和6年から採用された。採炭順序は6尺、8尺、10尺の順で各層払とも乾式局部带状充填を行った。ロングの面長は100^{メートル}米内外で充填の幅は6尺層で3～3.5^{メートル}米 間隔は7^{メートル}米内外、8尺層は3～3.3^{メートル}米～3.8^{メートル}米、間隔は6～7^{メートル}米が普通であった。充填材料には払跡の崩落^{クズ}研を用いた。昭和24年頃松島坑では8尺と10尺層の夾^{ハサミ}みが12～13^{メートル}米にひらいたので、採炭順序を10尺、6尺、8尺に変えた。この順序で採掘すると10尺層を払った後の上部層は一斉に沈下し、従来のように6尺を払った後の8尺層の炭質がい

ちじらしく硬化して採炭に苦しむようなことがなく、また6、8尺層を払う時の噴出ガス量も半減する効果があった。

24年に鉄柱が入ってきて木梁鉄柱となり、次いで26年にはカッペ採炭に切替った。

(3) 堅層における偽傾斜持込全充填法 橋立坑では、昭和8年下期から堅層採炭をやり、第三堅層採掘からはじめて長壁式偽傾斜持込全充填法を採用した。切羽は平均傾斜70度の堅層中に38度の偽傾斜で80^{メートル}米の払面をとり、採炭夫10名で出炭120トンという好成績をあげた。充填研は堀進研や修繕研を使った。

9年下期からは偽傾斜法を階段式に改めた。採掘順序は6尺、8尺、10尺の順とし、切羽の状況や研の質に応じて改善が行なわれ、昭和26年に堅層区域が終了するまでつづいた。

又、厳島坑では一列カッペ採炭や、長孔発破を実施したこともある。

(4) 10尺層総払い法 6尺、8尺層はほぼ完全に採掘できたが、10尺層は厚層のため、材料、保安、採炭技術の関係で8尺程度より採炭できず、残炭はそのまま放棄されていた。

戦時中來山した藤原調査団は10尺層総払いを指摘した。各硯は技術の総力をあげて取組んだがあまり効果はあがらなかった模様であった。新夕張では昭和17年4月5日から松島坑第十10尺ロングで実施した。

まず天盤まで切上げて準備し、天盤側5尺(半分)を5尺突込んで笠木をあげ、後山側の足(9尺位い)をたて、4～5尺の仮前足をたてて天盤を支え、その後踏前の採掘を行い、採掘終了後前足(3^{メートル}米のレール又は松丸太)を立柱し、本格的に天盤を支えた。

レールや材料が間に合わない時は下に下駄(台)をはかせた。この払いは成功し、松田松島係長は本社表彰をうけ、小松硯長はその他の功績も認められて技術界最高の榮譽である渡辺賞牌を授与された。

旧坑採炭の苦労はガス山に由る。すなわち、松島坑の最後は、大正年間に神通坑で残柱式採炭を行ない、断層と自然発火のため掘り残した区域の旧坑採炭であった。全面に旧坑が現われることもあり、天盤から間洩れがあると研が細かいため容易にとまらず、みる間にロング面いっぱいにふさいでしまうこともあった。又安全灯の灯がとどかない程遠くまで天盤と炭層の空隙があつたり、何よりも旧坑内に溜っていた炭塵が舞上るのには大変な苦労をした。

このため、経験豊富な先山を優先して番割し慎重に作業をつづけた。

炭塵が舞あがると隣の相棒の姿はもとより自分の使っている道具の先もみえなくなる程で、旧坑故に炭壁注水も全く効果がなく、水にぬらした縄ノレンを数^{メートル}米間隔にぶらさげて炭塵を付着させ洗い落す方法をとったり、陥没を防ぐため、踏前に8尺材の引割を敷きその上に立柱する方法も採用した。もちろん上添、ゲート坑道の維持は大変で、終掘まではどんなことがあっても採炭を災害なしに続行しようの合言葉で頑張った。

(2) 運搬

切羽運搬について見てみると、開坑当時は露頭からみえる部分だけ掘っていたので、掘った石炭を直接カマス詰としてつんでおき、これを下請坑夫が馬の背につんで鹿ノ谷駅まで運んだ

(ダンツケ)。坑内が深くなるにつれて盤箱(背負箱一上あけと底あけがあった)で運び、坑外は馬車や馬鉄で駅まで運んだ。

出炭量がふえてくるとスラ(櫓)箱が考案された。レール用にタルキを2本並べてハシゴのように横木を打ちつけ、引張ったり押したりする時に力が入るように工夫された。

スラ箱の下には溝のついた金具をつけ、タルキから脱線しないように工夫したり、スベリをよくするためにタルキに油をぬったり、水をかけたりすることもあった。

鉄製レールが使用されるようになってからは半コロ(車輪も箱枠も転車の半分くらい)や、木製七分転車が使用され、終堀までつづいた。

この後出炭増にともなってジャス・コンベヤー(流しコンペ)、慣性の法則を利用したシェーカー・コンベヤー、V型チェン・コンベヤー、下ベルト・コンベヤーと改善利用され、カップ採炭のように短時間に大量の石炭運搬を必要とするようになると、パンザ・コンベヤー(ダブルチェン・コンベヤー)が使用された。

斜坑および水平坑道運搬は(1)自転車道、(2)漏斗、(3)馬匹、(4)バッテリー・ロコ等で石炭を運んだ。すなわち、(1)自転車道 木製滑車3個にロープをM字型に掛け、両端に実車と空車を連結し、実車をおろす重力で空車又は材料車を引揚るもので、ブレーキは車と車の間に棒を差込み、あるいはテコ式に棒を装置して車と棒の摩擦によって速度を調節するものであった。

傾斜が最も急なところでは(2)漏斗(シュート)を設け、上部の石炭を漏斗にあげ、下の漏斗口から鉱車に積込む方法が採用された。

採炭方法が長壁式になってからは、大型の漏斗が設置され大きな効果をあげた。

電動機ができてからは、捲上機や循環機が採用された。

水平坑道では手押による運搬を主としていたが、出炭量が多くなり、運搬距離が長くなると(3)馬匹による運搬が採用されるようになった。馬丁が安全灯をもって馬のすぐ後の鉱車に乗り気合をかけながら引かせるもので、卸しになると馬の引綱をはずすと馬は横にそれ、鉱車のみが自走して捲立に到着するもので、その間に戸枠等があって戸番がうっかりしているとそのまま衝突し、馬が大ケガをすることもあった。1週間交替で坑内から出坑する時、坑口の光をみてよろこぶ様子や戸枠をあけてケガをしなかった名馬の話など、馬にまつわる逸話はたくさん伝えられているが、散々こき使われてケガをすれば屠殺され埋葬されるが、一夜明ければ骨と皮だけが残し、肉はすっかり掘返えされて喰われてしまった事が多かったといわれている。どこのヤマにも馬に感謝するために「馬頭観世音」が建立されている。

その後は苛練式電気機関車で最も長い期間使用された。

戦後石油が大幅に輸入されるようになるとディーゼル・ロコや(4)バッテリー・ロコ(蓄電式機関車)が使用されるようになった。

(3) 支保

支保は支柱のことであり、(1)坑道と(2)ロング採炭の2つがある。主に夕張一・二砦からこれら支保は導入された。

(4) 通気および排水

開坑当時はすべて斜坑方式の自然通気で、入気側と排気側の高低差、温度差を利用したものであったが、電気が利用できるようになって、切羽では極部扇風機を使用し、全体の通気は主要扇風機を使用するようになった。

松島坑はシロッコ型扇風機、250 馬力、風量は毎分 5,663 立方^{メートル}米である。他方、橋立坑はカーボー式、250 馬力、風量は毎分 5,600 立方^{メートル}米であった。

水平坑道や斜坑の湧水は自然下水で誘導し、捲立から電気ポンプで坑外に排水された。

(5) 選炭および坑外施設

石狩石炭(株)は基本に忠実で積極的な経営を進めたことは前述したが、松島坑口から選炭機に至る約 4 米^{メートル}の輪車路も凹凸はガケを削るのではなく、足場を組み、丸太を打込んで勾配をつくり、後に砦を埋めてつくっていったので、地山の安定がよく、選炭機も鉱山の選鉱場式の設計で、上部からあけられた石炭が逐次下方に移り、最下部の貯炭ビンから積出され熊の沢岐線で鹿の谷駅に運搬されるよう合理的に設計されていた。

最初は熊の沢選炭場といわれていたが大正 13 年頃新夕張選炭場と改名した。

又、五番坑選炭場も大正 3 年宇治坑選炭場と改名され、現グランドレースイ前踏切付近でポイントで国鉄線に接続していたが、大正 12 年 8 月に炭界不況のため宇治坑が採炭中止となったため選炭機は廃止された。

この他事業用の機械機具の製作、補修のため工作場、住宅補修などのための営繕、安全灯場、中央木挽場（現北炭農林製材工場）の付属施設もあり、一応自給自足的な鉱業所体制であった。

4. 保安と重大災害

ガス扱いは(1)当初の半てんをふり廻してうすめる方法、(2)ガス焼き、(3)風井、(4)手廻し扇風機など幼稚なものであったため爆発事故などが多かった。主要扇風機が使用されるようになってから風量をふやしてガスをうすめる方法を採用した。

坑内が深くなるにつれてガス湧出量が多くなり、従来方法で間に合わなくなったため、事前にボーリングで、新山や払跡からガス抜きをやり誘導するようになった。

(1) 安全灯の改良を見てみると、開坑当時はカンテラを使用していたが、間もなくデビー式安全灯、クラニー式安全灯が用いられるようになった。燃料は白絞油であった。

大正 7 年頃から昭和 3 年頃までは更に改良されたウルフ式安全灯が使用された。

(2) 電気安全灯（エジソン電灯）が導入されるが、最初はニフェ型のものだったが時間が 10 時間も保たないので昭和 5 年頃から全部エジソン電灯に切替えられ、その後も逐時改良されていった。

ガス検定器については最初は裸火の焰の伸張によってガスの存在を観測していた。その後安全灯を使用しその青焰の伸張程度によってガス量を検定したが、正確度にギモンがあるためバーレルガス検定器を採用し（大正 9 年）でウルフ安全灯を使用した。

昭和13年夕張第二砒1区(天竜坑)において大爆発を惹起し、その原因がガス検定に使用したウルフ安全灯のように考えられたため、昭和14年以降全面的に理研のダイヤル式ガス検定器を使用するようになった。

又、一酸化炭素(COガス)には、昔カナリヤを使ったが後に理研の一酸化炭素用の検定器を使用した。

イ 発破

最初は黒色有煙火薬を使い、導火線を用いて発破をかけていたが、その後改良につぐ改良が加えられ、終掘時は、硝安ダイナマイト51号(鉛付)、白梅爆薬(グリセコ)、硝安爆薬を使用し、導火線も昭和5年頃から電気発破を行うようになったので廃止された。

ロ 坑内保安帽

最初はねじり鉢巻の勇しい格好だったが、次第に帽子を着用するようになった。特に電気安全灯を着用するようになってからは電灯をつけられるようにフェルトを挿入して頭部の負傷軽減につとめ昭和9年頃からマイカルタ製安全帽にかわった。しかし太平洋戦争中は材料不足のため布製又は、ブック制帽子が使用された。

戦後物資の供給が順調になってからは、ベークライト製、プラスチック製、ファイバー製のマイカルタ帽子がほとんどになった。

又27年からは労使協定によって購入代金の半額が会社負担となった。

ハ 撒水および岩粉撒布 大正4年12月に石炭坑爆発取締規則が制定されてから、炭塵の飛散を押え、火気伝播性を未然に防止する方法として、炭壁注水、撒水、岩粉撒布が行なわれるようになった。このため女子や年少者の入坑就業者が急増した(昭和4年法律で禁止されるまでつづいた)。

ニ 防塵マスク 24年鉱山保安法が施行され、珪肺法が施行されてから特にマスクの使用が重要視され、マスクも改善されて使い易くなったので、33年1月6日のマスク貸与規定により粉塵職場には無償で貸与されるようになった。

その他、炭車逸走防止装置、坑内安全地帯の設置、炭車の連結装置、信号装置の改善、掘進先受け装置、坑内消化器の設置……等々保安設備装置もたくさんあるが省略する。

救護隊 特に選ばれた職鉱員で組織され、定期的に練習を行ない、不時の動員に備えている、出動時にはめざましい活躍してみんなに信頼されている。終掘時は3個班で夕張砒救護隊と合同で編成されている。

ホ 災害防止運動 古い時期は、係長単位の職場毎に結成された災害防止会が中心となって毎月役員会を開催し、全国安全週間や保安週間などの対策をたてていた。

労働組合が結成されてからは保安に対する要求が強く出された。鉱山保安法にもとづく保安委員会が毎月開催されて対策をたてる他、毎日入坑して保安管理者に警告などを行ってきた。

へ 保安教育 保安法にもとづいて新採用者には、テキストを使って1週間の保安教育を実施しているが、一般鉱員に対しては、再三にわたって要求したが、「安全手帳」を配布し、作業の

合間をみて係員が所管のものに実施することになったにすぎない。

しかし、作業が忙しくなるととくなくおざりにされる嫌いがあり、保安教育についてはまだまだ不十分であった。

ト 重大災害について

別表(表-1)のとおり、新夕張炭山が開坑されてから終掘までの65年間で、死者862名(大正9年まで若鍋砦を含む)を出し、さらに、表-2の記録にあらわれた昭和元年以降だけでも重軽者9,163名を出している。

これを推定出炭量1,500万トンとしてみると約2万トンで1名の死傷となる。このことからどう弁解されようと人名がいかにか軽視されたかがわかるであろう。

戦後労働組合が結成されて要求してから、次第に改善されて、殉職者遺族の採用、退職金の制定、見舞金制度が確立されると共に、労災法によって葬祭料、遺族補償費4日分(後に年金制となる)が支給されるようになり、負傷休業者にも夫々補償措置がとられるようになった。しかし多くの犠牲者を出した戦前は退職金もなく、雀の涙にひとしい見舞金ですべて打切られたものである。表-3はガス山に由来する爆発災害で、明治41年93名の死亡者を出している。

表-1 明治39年以降新夕張礦死傷者調(大正9年までは若鍋砦を含む)

年 度	死	重	軽	年 度	死	重	軽
明39年	3			12	0	2	66
41	93			13	3	1	157
42	7			14	2	1	124
43	3			15	1	1	177
44	33			16	6	1	157
45	4			17	8	1	142
大2	8			18	10	2	189
3	436			19	11	5	198
4	6			20	4	1	108
5	10			21	3	1	140
6	11			22	7	1	190
7	13			23	3	3	233
8	16			24	1	0	398
9	52			25	1	86	367
10	17			26	0	175	52
昭1	8	20	1,352	27	3	111	16
2	16	20	1,290	28	0	104	9
3	11	24	812	29	2	107	12
4	7	14	585	30	1	72	9
5	5	5	385	31	0	90	7
6	9	7	203	32	2	59	7
7	2	2	99	33	2	52	10
8	2	0	121	34	3	83	7
9	7	0	103	35	0	90	8
10	4	0	62	36	3	111	65
11	3	2	49		862	1,254	7,909

(註)
 ※大正11…14年は資料なし
 ※災害統計について
 ○昭和25年下期までは「鉱夫死傷者月報」による
 死(即死)重傷(医師の判断で官庁に速報したもの)
 軽症(治療予定3日以上制限なし)
 微傷(〃2日以下および就業治療)
 ○昭和26年以降は「災害月報」による死(毎月統計表〆切りまでに死亡したもの)
 重傷(14日以上休業治療のもの)
 軽傷(3日以上13日まで休業治療のもの)
 微傷(統計には含まれず2日以下休業および就業治療のもの)

表-2 変災調べ（爆発）新夕張礦

年 月 日	時 間	死 傷 者			原 因	個 所 名
		死	傷	計		
明 37. 2. 1	後 2.00	0	1	1	安全灯	1 の沢 1 番坑 3 号切羽
〃	〃 4.00	0	1	1	〃	3 の沢 1 番 6 層 6 号
39. 5.27	前 7.00	3		3	〃	1 の沢 7 番坑 3 号 4 号間
40. 5.22	後 2.30	0	0	0	発 破	1 坑 5 番坑 10 号堅入 10 尺右引立
〃 6.29	〃 9.50	0	2	2	安全灯	5 番坑堅入 6 尺左引立
〃 9.27	〃 9.00	0	1	1	発火具	8 番坑左 6 尺横坑引立
41. 1.17	〃 1.50	93	22	112	不 明	3 番坑 5 番坑及び同番外
42. 3.12	前 7.40	0	1	1	安全灯	5 番坑番外 10 尺奥向 4 号
43. 8.10	後 0.30	0	1	1	〃	6 番坑 2 中切
44. 2.25	〃 2.30	16	4	20	〃	6 番坑 1 中切 10 尺坑道
大 5. 1.30		0	1	1	桜印タイヤ発破	6 番坑 2 中切 10 尺坑道 4 号
合併以後						
大 9.12.13	後 0.15	9	5	14	安全灯	6 番坑本坑斜坑上添引立
昭 2. 2. 3	前 7.00	0	4	4	〃	宮嶋坑橋立堅入 8 尺本向引立
〃 3. 3	〃 9.00	0	3	3	〃	松島坑右片坑道第 2 卸左風坑昇
18. 1.29	〃 11.45	1	3	4	発 破	夕張第三破松島坑第 10 排気風道奥部
〃 9. 5	後 12.10	11	2	13	〃	同松島坑電車坑道第 1 入気堅坑

表-3 自然発火 —— 新夕張礦（含む若菜辺破）

年 月 日	時 間	個 所 名
大 3. 9.29		三番坑旧右八尺坑道
10. 8.21		神通坑右五片 12 号中切 4 号
14. 3.21		松島坑左七坑道八尺中坑道
〃 7. 4	夜	橋立坑中坑五号八尺二昇三昇間
〃 8	〃	〃 中坑第四堅入八尺
15. 6		〃 第一堅入奥
〃 8.22	後 12.30	〃 五号斜坑中坑道八尺七号
昭 3.10. 4	〃 0.00	住吉坑右三坑道捲立
4. 6. 3	〃 8.00	橋立坑新十尺坑道旧 11 号附近
〃 4.18	朝	宮島坑八尺第一打上（臭気）
〃 12. 3	後 2.00	〃 五番坑切替引立（再発）
5. 5. 1		（発煙発火）宮島坑道
〃 10. 4	14.00	（発煙） 〃 五番切替引立
9. 6.20		（臭気発煙）松島坑堅入坑道乗越風道
13. 8. 6	5.00	（発煙） 〃 左風道坑口から 190 メートル附近
19. 5.23	7.00	（発火）橋立坑六坑道卸一片旧八尺坑道密閉
25. 3.20	20.30	（発煙） 〃 八尺堅層十尺ゲート三昇
26. 4.12	18.00	（ 〃 ） 〃 〃 十尺坑道 二昇
〃 12.31	8.30	（発火） 〃 〃 旧一昇密閉

5. 出炭, 人員

(1) 出炭の推移

開坑当時の出炭は資料がほとんどないため正確に知ることは不可能である。

古老の話しによれば、谷七太郎が経営するまではごく少規模であったことが推定できる。次

の表－4 は明治 36 年からのもので、資本主義の発展と共に毎年出炭が延びている。

しかし好不況の波にも影響をうけたり、技術の進歩で変化することもあった。

戦前で一番出炭量が少なかったのは昭和 10 年で、最高は、松島坑で 10 尺層総払いをやった昭和 18 年で 47 万 14 トン(日産 1,424 トン)であった。(資料中昭和 16 年が約 51 万トンとなっているのは、会計年度が変更された年で昭和 16 年 1 月から 17 年 3 月 31 日までの期間で、3 ケ月分が余分に含まれているからで、日産は 1,043 トンの数字である)。

(2) 人員の推移

開坑から明治 35 年頃までは、坑夫はほとんど飯場制度の下で働かされていたと思われる。

谷新夕張炭山となってからも、飯場、下請、直轄などがあって知ることとは不可能である。明治 41 年 1 月 17 日の五番坑爆発当時 150 名ぐらいの在籍あったといわれるが、請負坑夫なのか、直轄か、坑内のみかは不明である。

大正 3 年頃は 700 名、11 年頃は 1,400 名とふえたが、大正末期から昭和初期の不況時には 600 名前後に減っている。戦時中は募集を強化し、外国人労働者も加えて表－4 の推移をたどっている。

表－4 出炭及び人員の推移

年 度	総出炭 (トン)	日産	人員	年 度	総出炭	日産	人員
明 36	37,199			15	298,800		1,084
39	122,044			16	509,400		1,043
43	119,071			17	406,600	1,255	1,245
大 3	130,118			18	471,300	1,424	1,370
8	253,291			19	466,900	1,398	1,620
9	278,079			20	237,900	744	847
10	179,121			21	179,200	591	1,336
11	217,424			22	226,300	737	1,599
12	277,165			23	231,100	773	1,680
13	301,044			24	241,500	836	1,680
14	329,692			25	251,400	864	1,611
15	326,136			26	283,600	942	1,455
昭 2	352,755			27	265,300	1,027	1,403
3	324,612			28	285,000	943	1,194
4	363,423			29	279,600	916	1,171
5	339,475			30	242,400	822	1,165
6	325,400			31	271,700	912	1,170
7	294,300			32	298,900	1,052	1,165
8	270,600			33	204,100	899	1,165
9	260,400			34	282,600	958	1,165
10	228,300			35	294,500	988	1,055
11	255,700			36	262,600		
12	328,300			37	188,700		
13	345,500						
14	288,600						

(註) 昭和 16 年 3 月までは会計年度(12 月～11 月)にて、17 年度以降は(4 月～3 月)となっている。以上の資料は夕張鉱業所労務課調査による。

又、戦前は熟練工を必要とせず過激な労働を必要とするため農業からの転出者が多く、季節労働者も多かったため、1年未満45%、3年未満30%とほとんどが3年以内に移動していることが窺える。

終戦直後は別として合理化がはじまった頃は交替採用以外の採用はストップした。

6、技術者と管理体制

炭層条件が他のヤマに比較できない程悪条件下にありながら、出炭、コスト、保安などが社内でも常に優秀な位置をしめ、ドル箱ヤマと云われてきた。

北炭の重役になるためには、ほぼ全山を廻るコースが一番であるが、特に夕張鉱業所、幌内鉱業所の中心砒と技術的に難しいといわれた新夕張砒と万字砒は必ず通らなければならないといわれていた。

このヤマで実績をあげるか、つぶれるかということはその後の出世コースに重大な影響を与えることになるため、血ヘドと吐いて頑張ったという逸話も残っている程である。

このヤマで実績をあげて北炭重役になった戦後の主な人達を列記してみることにしよう。

元取締役会長 吉田 嘉雄（第7代砒長）

元取締役社長 佐野 岩雄（保安係員）

現取締役社長 粕谷 直之（副砒長）

元取締役副社長 藤江 信

元専務取締役 中島 成（松島坑主任）

元専務取締役 青木 茂（12代砒長）

元常務取締役 大溝 友吉（10代砒長）

小松三四郎（9代砒長）

西村 良平（橋立坑係長）

折目 薫（松島坑係長）

長屋 忒（初代砒長）

山田 直正（石狩石炭社長）

加藤 博俊（13代砒長）

古賀 健太（5代砒長）

深谷 二郎

この他三代砒長加藤直正、四代砒長の光増直（昭和グランドを造成した人情家）、技術や保安の神様といわれた11代砒長松田友治……等々多士済々である。

北炭と合併した当時の初代長屋砒長から第14代加賀谷正照砒長で終掘となったが、優秀な技術屋を育て北炭の繁栄に積極的に協力したヤマであった。

その原動力は何であったのか。

昭和38年12月に発行された新夕張炭砒労働組解散記念誌によると、ほとんどの砒長（生

存中の砥長に求めたアンケート)が、「新夕張の人々の暖い心と強い団結心で生産面でも保安面でも実績をあげることができた」といっている。

住宅地が平地で、鉱員宅と職員住宅が近くにあって家族ぐるみの交流が大きな影響を及ぼしているのではないかと云われている。

正月や祭典などは、先づ槌組の後山が先山宅へあいさつに行き、連れだって係員宅へ行って交流し、主任宅から係長宅まで足をのばして交流を深めるのが常識となっていた。

又、槌組でも割当酒が盛んであったとも云われているし、比較的人の出入りが少なく、採用も縁故採用が多く、終掘時の出身地調べによれば秋田出身者が34%の外、青森、宮城を含めると55%にも達していることが人間関係を良好にした原因でもあった。

又、全砥で4名の鉱員が出身地が近く定着率が他砥より高く、昭和グラウンドを舞台にした運動会などの全砥行事、災害防止会などが中心になって実施した坑口神社祈願祭など交流に全坑（坑毎に）が参加できる仕組みが、職場での人間関係も好転させ、生産や保安に実績をあげる結果となったものであろう。

又、鉱業所に強く拘束されない砥独自の予算の使い方が人間関係を強化する方向で使用されていたことも成果の一つであった。ここに具体的な資料を提起することはできないが、戦後労働攻政に対処方針として、予算は鉱業所に集約され、砥の運用ができなくなってからは(27年頃)砥の独自性がなくなって労使関係もギクシャクするようになった。その一例は、伝統を誇った盆踊りにしても、全市を代表する末広の盆踊りが、鉱業所の予算按分では人口按分に多少特殊事情が加味される程度になってしまうということがあった。

二、生 活

1、従業員と福祉

(1) 住宅一開坑当初は坑口に近い方の1区から住宅がたちはじめ、逐次2区、3区、4区、その他と発展して行った。所謂炭鉱城下町が形成され、石炭を唯一の商品生産とするモノカルチャ（コロニー）を形成する。

最初は(1)飯場や1棟20戸の棟割長屋であったが逐次、(2)6、3長屋(8.8坪)、(3)模範長屋(6畳2間に台所付)、(4)2階建長屋(6畳2間に台所付)、(5)コンクリ長屋(モルタル造り2階建て)、(6)特選長屋(特選労務者用で8、6、3畳に物置、台所、便所付き)、(7)炭住(戦後できた平屋2戸建)、(8)鉄筋アパート(昭和27年頃から建てられたもので4戸建24戸)、(9)ブロック住宅(融資住宅で2階建4戸、13.5坪)と建てられていった。又、旧住宅が建替えられると同時に外便所、外水道から内水道内便所にかわっていった。住宅の入居基準は点数制で行なうように改善された。

(2) 生活用品の確保一開坑の頃から商店に近く、行商もあって生活必需品を容易に手に入れた。しかし、石狩石炭(株)が北炭と合併し、北炭が分配所を設置してからは取扱品も逐次ふえて

いったので、必需品は分配所を利用することが多くなった。

戦時中はすべてが配給制となり、戦後の復興期を過ぎると会社の合理化で組合が設立した生活共同組合に吸収された。

水は貴重品並みであった。最初は沢水を引いて桶などに溜めたり、井戸を掘って炊事用の水を確保した。主婦や子供達が運んで桶や水ガメにためておくため大切に使用し、顔を洗った水で手足を洗い、炊事用も米をといた後の水で食器を洗うなど有効に使った。

その後外水道として長屋と長屋の間に共用樽が設置され、井戸端会議が生まれる期間が長くつづいたが、住宅改造と共に（27年頃から）内水道となり、豊富に水が使用できるようになった。水を大事にした現れとして水神碑が夕張にあった。

(3) 教養、慰安、娯楽―石狩石炭 KK は子弟の教育にも熱心で、明治 43 年に末広の病院隣に三角屋根の建物をたて、夕張最初の幼稚園を開設した。この幼稚園は大正 8 年に閉鎖されるまで夕張唯一のものであった。

小学校は夕張第一小学校が通学区域であった。中学教育としては、大正 8 年に私立夕張工業学校が北炭によって設立され、大正 12 年には夕張鉱女子家政塾が開設され利用された。工業学校は炭界不況のため昭和 10 年 3 月で廃校となった。この施設を利用して採炭係員養成所を設置した（昭和 10 年 5 月―27 年 9 月廃校）。

(4) 坑内鉱員養成所―昭和 4 年に設置した労務者養成所が戦後労働基準法などの立法措置によって実体に合わなくなったため、昭和 22 年その内容をあらため、夕張鉱業所の所属として、坑内鉱員養成所と改称し中学卒業生を入所させ、2 年間の修了後は北炭に採用することとした。

(5) 北炭高等鉱業学校―は前述の鉱員養成所の入所者が逐年減ってきたため、特殊学校法人の資格を得て奨学資金制度を採用し、満 18 才になると北炭に採用される仕組みにした。

その後建物も旧係員養成所から鹿の谷分院跡に移り、名称も北炭高等鉱業学校にかえて充実を図ったが、炭鉱の不況で入校生もなくなったので 46 年 8 月末で閉鎖された。

卒業生 864 名はそれぞれのヤマで中堅として稼働するようになっており、この卒業生が職場の最高指導権を確立する時こそ北炭が安定する時だと期待が大きかっただけに残念な結果である。

(6) 家政女学院―大正 12 年に家政塾として女子の教育に当たってきたが、戦後各種学校の認可を得て昭和 24 年 9 月校名を夕張家政女学院と改称したが、時勢の推移とともに生徒数が減って 50 年 3 月に閉校した。

(7) 夕張炭鉱病院准看護婦養成所―この養成所は大正 13 年から設置され 387 名の卒業生を出した。戦後では法の改正によって昭和 28 年 3 月新制度にそって運営され、886 名の卒業生を出して、夕張の貴重な医療従事者として腕をふるっている。

労働力の再生産につながる慰安・娯楽はどんな変化をしてきたのだろうか？

開坑当時からあまり変っていないものはお酒である。昔はあがり酒といって、現場から帰って玄関でまず 1 ぱい。この味は格別であったという。ほとんどの人は夕食時に飲む晩酌である。

嬉しいというのは飲み悲しいというのは飲むことは「一つの習慣性ともなり風俗ともなっているとのこと……」と『夕張発達史』では伝えている。

炭鉱が近代化され、趣味も娯楽もふえてきて酒だけの時代とは違ってきているが、勤務が三交替制になり、超過労働などで疲れて帰ると、一刻も早く寝て疲労を回復するために酒の力を借りることになる。医師の調査によると炭鉱地帯程にアル中患者が多い地域はない。大部分の人がアル中予備群に入っているのではないかと云われている。キケンな坑内の重労働と昼に就寝しなければならない勤務体勢下の必要悪というか、飲み過ぎなければ、「酒はくすりだ」とも云えるようだ。

(8) 風呂―入浴が非常に重要であることは昔から変わっていない。特に坑内の疲れを回復し、汚れた身体をきれいに洗いおとして、現場と家庭生活のケジメをつける場所であったので毎日入浴することになっていた。昔は衛生風呂（五厘風呂）といって、入浴料金をとっていたがその後昭和 16 年頃から福利施設として無料で入浴できるようになった。この頃は一旦家へ帰ってから出直したので、家族の者も仕事のきびしさが判る仕組みであり、親子が一緒に入浴するため裸の交流があった。

30 年代半頃から坑口浴場が開設されるようになり、かつての坑内作業衣を着てスッコ（道具袋）を背応って通勤する炭鉱風物詩ともいえる通勤風景は消え、家族も又働らく者の真黒で汗くさく、重労働権化のような姿をみることができなくなった。

(9) 娯楽―開坑当時の酒とパッチに代表された娯楽も次代に映画や芝居に人気うつり、盆踊などは盛況をきわめたものであった。

イ 行事も運動会や相撲大会から野球などが行なわれるようになった。

ロ 手軽なものでは囲碁、将棋に盆栽、マージャンなどは高級な方であった。

ハ 戦後は、各種のサークルが雨後のタケノコのように誕生し文化活動の全盛をきわめた。

ニ 体育関係では軟式野球部が特に有名であった。バスケットボール、卓球、相撲、柔道、排球、スキー、陸上競技、バトミントン等がサークルとして登録されていた。

ホ 文化サークルの活動も目覚ましく、楽団やまの灯、人形劇ポックリ座、新夕張幻灯会、写真ピントクラブ、写光クラブ、生活綴方、俳句は新夕張俳句会、こまどり俳句会、やまびこ合唱団、社交ダンスクラブ……等

ヘ 趣味のグループは、囲碁クラブ、将棋クラブ、盆栽会、菊愛好会、釣魚会だけでも 3 の会があった。旅行も盛んであった。

ト 又、組合が主催して各種講習会の開催、労働講座、学習活動、組合員学校、機関紙活動、職場新聞なども組織された。

2. 福利・共済活動

北炭が健康保険組合を設立した大正 15 年 12 月以前の共済活動は主に友子制度による自前のもので、会社はほんの涙金程度の見舞だけであったといわれている。

健保組合が設立されてから療養給付、傷病手当金、分娩費、埋葬料が支給されるようになったため、友子制度は急激に衰頽していった。しかし内容が現在のように充実されるようになったのは、戦後労働組合が結成されて果敢に改善要求を進めた結果によるものであった。したがって、福利厚生関係の充実も同様である。

三、労働組合

ここの労働組合は終掘配転で解散するまで炭鉱労働運動に多くの足跡を残しているので主な経過をふりかえってみることにする。

(1) ストライキをやってから組合結成

昭和20年10月22日に橋立坑の一番方は途中で出坑して会館に集り、食糧よこせ以下11項目を要求することを決め自動的にストライキに突入してしまった。このストライキは戦後朝鮮人や中国人のストライキを除けば北海道で最初の英雄的なストライキであったといわれている。交渉は2日間に渡ってストライキの中でつづけられ、一定の成果を治めて解決した。この報告大会が23日の夜開催され、交渉に当たった21名を組合創立委員に指名した。これが組合創立大会となったが、届出は10月24日にした方がよいとの理由で創立年月日は24日になっている。ストライキといえ、交渉といえ大会も全く変わった組合創立であった。

組合費は月額男50銭、女30銭で別に加盟費1円であった。組合員は765名であった。

終戦までは会社のいうことをよく聞いて団結心が強く北炭でももっともトラブルの少ないヤマと思われていたのがいきなりストライキを執行して組合を結成したことは会社幹部も驚かされた（大溝砒長談）といっている。

(2) 食糧確保、民主化運動

創立当時の活動はどこの組合でもほぼ同じようなものでまず食糧確保が最大の目標であった。常駐役員が会社給与であったので労使共同で食糧確保にあたったようなもので道内各地をまわって集めた。

この他、物資の公平な配分、食堂経営の改善、会社内規の公表、賃金引上げ、経営の民主化など生きるための要求と戦時中の一方的な会社のやり方に抗議して民主化を求める活動が目立った要求であった。

(3) 炭鉱労働戦線の結集

北炭系の各砒に労働組合が結成されたので21年2月3日夕張に集って「北炭系労働組合連合協議会（北炭労連）」結成を話し合い、賃金など5項目の要求で会社と交渉した。

21年11月11日に結成された「北海道炭山労働組合」が22年には北海道炭鉱労働組合に発展した。又、全国組織は「全日本炭鉱労働組合（全炭）」が結成され、北炭系はこれに参加した。その外「日鉱」、「炭連」があり全炭労働者の結集をはかるため、22年1月25日に「炭協」が結成された。その後「日鉱」「炭連」が脱退したため、22年10月に「全日本石炭産業労働組合（全

石炭)」に改組した。昭和 24 年に至って鉱業連盟の設立、GHQ の指示による日本経済の自主態勢の確立、総選挙で民自党の大進出など資本家階級の歩調が統一されてきたので、これと対抗するためには炭鉱労働者の戦線統一が強く望まれるようになった。こうして 24 年 4 月には全石炭を解散し、日本炭鉱労働組合（炭労）に裸合同し、ここに炭鉱労働戦線は統一された。

(4) 組織のうつりかわり

労働法規の改正が行なわれた結果、24 年 10 月から組合専従役員の給与が全面的に組合負担になった。

又、この改正法によって、かねてからその過激な行動と二重組織として批判されていた青年部、婦人部が各組合で解散させられていった。新夕張でも解散はしたが、一専門部として青婦対策部に切替えて存続したことが特徴であった。レッドパージを経てすっかり停滞した労働運動を、この青婦対策部が中心になって文化活動や学習活動を再構築し、63 スト、厳島坑中止反対闘争、重点ストライキなどで青行隊を組織し、その活動が認められて再び青年婦人部を復活させた。

青年の活動は、夕張地区青婦協結成の原動力となり、文化活動を高め、スクラップ・アンド・ビルド政策の中で闘われた反合理闘争や政転闘争、そして新夕張砒の終掘、全員配転を決めた闘いの中核として活動し大きな成果をあげる結果となった。

この組合の特色は、徹底した大衆討議や組織点検活動を経て、資本と対決できる組織づくりを達成したことであった。この組織形態は、やがて配転された平和労組に継承され、夕張新鉱労組にも受けつがれていった。

それは職場闘争機構を組合の正式機構に取入れ、統一闘争と職場闘争を一元化したもので、大衆闘争路線すなわちどんな小さな職場にも労働組合があることを実証するものであった。

結成された当時の組合は、各職場から選ばれた 30 名の執行委員の互選で組合長が選ばれ、組合長の指名で三役や常任執行委員が決められる仕組みになっていた。

それが都市労働の経験者や青年部の主張によって逐次改革されていった。昭和 30 年頃は三役、常任執行部は全組合員の直接無記名投票で選出され、執行委員は各分会毎（坑毎に）に 50 名に 1 名、代議員は 10 名に 1 名の割で選出され、常任執行委員会、執行委員会、代議員大会、全員大会の機関で運営されていた。

そして闘争時には常任委員会が最高闘争委員会に、執行委員会が若干の闘争委員を充足して闘争委員会に、居住地区は地区委員長を地区闘争委員長にした地区闘争委員会を設置して運営していた。

このように組合機構の中にさえ、日常運営と闘争時と別々の機構で運営されることは、労働組合は団結してたたかわない限り、権利を守ることも地位を向上することもできない以上当然機構は一元化されるべきもの（名称は別にして）と自覚されるようになったことに由るのである。

しかし、このヤマが炭層条件が悪いにもかかわらずドル箱ヤマといわれ、まとものよいヤ

マといわれたのは、前述したとおり職場や地域における人間関係の確立すなわち労務管理がよく出来ていたからで、労働組合ができてからも、職場には親睦会、地域には部落会があってその運営には夫々会の息のかかった影響力の大きい長老があたっていた。

だから労働組合が闘う組織を運営の基本にすることには大きな抵抗があった。それだけに1年にわたる徹底的な職場討議には熱がこもり、この組織づくりが成功しなければ終掘を目前にして諸条件を勝取ることは不可能との判断ですすめた結果、第21回炭労大会の方針にもとづいて職場委員会が組合の正規の運営機構に採用された。

すなわち、(1)常任委員会、(2)執行委員会(分会別職種毎40名に1名毎に選出された職場委員長並に副委員長、地区毎に1名選出された地区委員長で構成)、(3)代議員大会(分会別、職種毎に10名に1名選出された職場委員で構成)、(4)全員大会(最高決議機関)という重層的ピラミッド組織が終掘まで運営され、機能していた。ただ職場組織は事後順調に運営され、ロング長公選、職場の民主化、労働条件、諸設備の改善などに大きな成果をあげたが、しかし、地区委員会は会社の激しい抵抗もあり、時間も少なかったので十分な成果をあげることができなかった。

(5) 賃金および労働条件

賃金はほとんどが北炭労連や炭労など上部組織でたたかったのでここではヤマ元の特徴的なことだけにふれておこう。

まず昭和33年の賃金闘争は96日間の重点ストでたたかった。このたたかひの最中で青行隊は連日組合学校を開催しオルグを講師にして学習した。この時の問題点は、道炭労の調査と資料No2付録による賃金調べで、北炭夕張と三井美唄の賃金1方当で108円も低く、月収では、5,946円と北炭が低く、なぜ低いのか？ どうしたら回復できるのかが中心になり職場闘争の必要性が強調された。

この学校でオルグの指揮文書を組合機関紙に発表したところ、炭労新聞では「歯に衣をきせぬ忠告、私の山にきたオルグ達」の見出しで、トップ記事で報道したため、山の恥をさらすとか、又、逆に真実を勇気をもって発表したことは如何程ほめてもほめすぎではない(賃闘自己批判書)とかで連日炭労を湧かせた。

このたたかひを契機にしてヤマ元の意識は変り、整備された組合機構にもとづいて積極的に山元闘争や職場闘争が組織され着々と成果をあげて他社に追いついて行った。

こうした中で34年7月には当時としてはめずらしく山元闘争だけで24時間ストを3日間うち抜いた。このような努力が実ってか、37年3月末に平和炭鉱に配転させる交渉の中で、新夕張鉱の賃金は平和炭鉱と1方当り16円63銭(定額給)も高くなっており、北炭交渉で平和炭の賃金を8円引上げることに成功する大きな要因となった。

炭労全体の中でも多くの組合が会社の合理化攻撃の中で、賃金や労働条件が切下げられている中で、新夕張の現状を守り抜いたばかりか、低かった平和炭(人員約3倍)の賃金を8円も引上げたことは、炭労として年2回賃金闘争をやったような奇蹟的なできごとと云われた程であった。「一職場の問題でも全山ストをかけて闘わない限り条件を引上げることはできない」と

の方針が実を結んだ結果ということができた。

(6) 企業整備反対闘争と租鉱権設定反対

(1) 企業整備反対闘争

本格的な合理化がかけられたのは、レッド・パージが終り、歴史的な長期 63 ストが解決した翌 28 年 8 月 24 日であった。それまで北炭は「他社が首切りをやってもわが社は別の方法で合理化をやり首切りは行なわない」といって幹部が山廻りをしていたが、突如 3,000 名の首切りと事業場閉鎖を含む大合理化を提案してきた。

この中には「厳島坑は中止」の提案が含まれていた。北炭労連の方針に基づいて山元は連日希望退職阻止のピケを張り、鉱業所や山元経営者にデモをかけ抗議行動を展開した。

希望退職者は、停年近い者や、回復しつつあった本州方面からの転入労働者を中心にほぼ予定通りの数に達したため、たたかいの焦点は「厳島坑中止反対」にうつった。

組合は分会毎に波状デモを山元経営者や鉱業所に連続抗議し、札幌支社にも抗議行動を展開した。又、当時としてはめずらしく組合の対案「厳島坑中止の実体、企業合理化を衝く」のパンフレットも作成し一般市民にも訴えつづけた。このパンフレットは 6 項目 17 頁から成り、埋蔵量、生産原価、販売、稼業方法について相当正確な数字をあげて説明しているので大いに注目された。組合員の志気もレッド・パージ以後の沈滞を完全に吹きとばす程高まった。しかし闘いが長びくにつれて、希望退職で減員になった松島坑や橋立坑の人員のやりくりがうまくいなくなってきたことや北炭労連傘下の大部分の支部が条件交渉に入って了解点に達していたため遂にたたかいに終止符を打たざるを得ない結果になってしまった。しかしこの激しく長かった（100 日）たたかいを通して「中止後は組夫・租鉱などによる採掘は行なわない、再開する時は橋立坑から立坑をあげて直轄で行う」ことを確認させ完全配転や配転に伴う諸条件をきめて 12 月 1 日調印された。このたたかいの中で青年層は幻灯会、うたごえサークルを結成し、労働講座や社会科学研究会に結集して、労働者に最も必要な学習を活動をはじめた。主婦会もそれまでの親睦会的な運営から「炭婦協」を結成して組合と共に進むことになった。

このたたかいの自信と経験はこの後の組合を発展させるために大きな力になった。

「信頼できる人程徹底的に議論できる。議論するから決った事には責任もってわだかまりなく行動できる」という作風が確立され、10 年後の常任、執行委員、代議員の約半数がこのたたかいに積極的に参加した青年層であったことからみても明らかであった。

(2) 嶺水租鉱権の設定を粉碎

32 年 8 月 21 日会社から嶺水坑（旧厳島坑）と宇治坑の租鉱権設定が提案された。

この頃は親会社の懐を痛めないで利潤を追求する方法として、北炭はもとより全国的に租鉱権設定が流行していた。炭労は、これに歯止めをかけるため監視活動を強めていた。提案をうけた山元労組は直ちに炭労および北炭労連に報告し指示を求めた。

宇治坑はすでに租鉱権で稼業中のものを名義変更するだけであったので条件を付して認めることにしたが、嶺水坑については、3 年前の激しい闘争の中で結ばれた協定（再開する時は直

轄夫をもって行なう) を無視するもので認められないと山元の態度を決めた。

交渉は再三行なわれた。会社は直轄で再開できない理由として①経済性がない、②市場性がない、③企業性がないことをあげ、組合が認めなければ現在探炭中の大和鉱業 KK に売山するとか、山炊炭は夕張並粉にするとかおどかして租鉱権を認めさせようとしてきた。又、交渉が続いている最中に、スト中の陣中見舞と称して大和鉱業 KK から代議員以上の機関委員や役員にウイスキーの角瓶が配られたり、集会に酒が届けられたり、解散した組合を結成し直して新夕張出身者を役員にして代議員大会に陳情させるなどあらゆる懐柔策がとられた。

厳島闘争を果敢にたたかった租鉱権反対派が狙われたのもこのころであった(後年俺が止めさせなかったら K 君は刺されていたかも知れないと、大和鉱業 KK の S 氏が語っていた)。

このように緊迫した中で執行委員会や代議員大会が開催されたので論議は活発だった。

第 1 回代議員大会は、34 対 52 で執行部提案通り租鉱は認めない事が決ったが、これからの会社のやり方は悪辣きままるものであった。従来代議員大会は成立条件すれすれの出席であったが、第 2 回代議員大会は会社側が労務係を動員して代議員のかり出しをやり、傍聴者を多勢動員した。

討議は租鉱権設定賛成者の発言が圧倒的で勝負はあったかの観があった。

しかし厳島坑でたたかった若手活動家が「租鉱を認めなければ私の弟も失業するのでしのびないが、組合があればたたかって結んだ協定書が短期日の間に破棄されることを認めたらこのあとわれわれの生活は誰が守るのか」、「陣中見舞や個別訪問などで正常な判断ができない程組織が攪乱されている。義理人情で目先のことにとらわれているとお互いが不幸になる。組合の基本線を守ろうではないか」と遠慮がちの発言をして採結に入った。結果は 57 対 44 で租鉱を認めないことが再び確認された。

このことを新夕張労組の解散記念誌「新夕張と共に」は、『このたたかいは執行部内部にも意見の完全一致がなかったため余計な混乱をおこしたが、とにかく討議が大和鉱業 KK 対組合、大和従業員対組合員の方向に発展しそうだったことを、よく本質に戻しあくまでも組合対会社、協定書の遵守を貫き通したことは大きな成果であった。とくにあらゆる妨害をハネのけて組合の主張を守り抜いたことは特筆に価いすることで、当時炭労傘下で租鉱権認定を粉碎した唯一の組合となった』と評価している。

(7) 戦術とストライキ

組合結成以来解散までの 17 年半で行使した戦術は、(1)全面ストライキ(24 時間以上)、(2)部分ストライキ(運搬部分ストが代表的なものであるが、選炭機、電話交換手、自動車運転手など個人指名の戦術)、(3)時限ストライキ(1 時間 50 分の他 30 分、10 分、半日などのストライキ)、(4)拘束時間厳守(早出残業を拒否し休憩時間を一斉に実施する戦術)、(5)保安違法闘争、(6)作業番割拒否闘争、(7)マサカリ闘争などが採用されている。(職組では発破スト)

資料によれば、全面スト 286 日、部分スト 18 日、時限スト 29 日、その他 54 となっている。17 年半の操業日数を約 5,340 日とすれば、13 日に 1 度づつ何らかの実力行使を決行したことに

なり、その他の戦術を加えると 10 日に 1 回の戦術を行使して資本と対決したことになる。このように新夕張労組は創立以来上部指令の完全消化、会費やカンパの完全納入、終堀時の完全配転と共に誇るべき組織だった。

四、終堀、全員配転

第三砦（新夕張砦）が深部に進んでいくと間もなく清水沢砦、夕張第二砦の稼行区域に入るので深部移行を早くやめ、鹿の谷開発か平和砦北部の開発かを急ぐべきだとの論議は早くからあり、そのための調査は着々と進んでいた。

昭和 32 年上期の労使協議会では「45 年頃に鹿の谷立坑をつくって移行する」との長期見通し説明されている。

この頃はすでに特需時代が終って閉山合理化がすでに進行中であり、炭労も「体制を適格に把握し長期稼業に備えるための調査を実施し必要な措置を行う。そのために代替砦区の設定、優良砦への配転、希望者に対する他産業について事前に協議し無理のない形で具体的に実施する」との方針をきめている

この方針にもとづいて労使協議は間断なくつづけられた。

35 年 5 月の交渉で会社は「燃料革命の進展や他社の企業整備進行情況、夕張第二砦の爆発災害等によって銀行融資ができなくなったので北炭将来の基盤として夢みた鹿の谷立坑の計画は変更せざるを得ない」と説明した。

その後 35 年に 3 山分離が強行されるなど北炭をめぐる周囲の状況はきびしくなってきた。この危機を乗り越える方法として ①停年制改訂 ②坑外職場の分離統合 ③減耗無補充など 11 項目の合理化と共に新夕張は 37 年度終堀し、さらに配転者数は夕張一砦 50 名、二砦 313 名 清水砦 249 名 平和砦 362 名 連帯 44 名の提案してきた。

この提案をもとに労使協議会、団体交渉が山元、札幌、東京で繰返しおこなわれ最終的に 36 年 11 月 10 日「会社提案の長期計画による終堀を確認する。配転は夕張第二砦、平和砦を主体と一部を清水砦とする、賃金は受入れ砦の賃金協定による。矛盾ある場合は協議する」との方針を確認し、山元交渉に入った。

山元交渉では、①配転者の編成基準の設定 ②福利関係と便宜供与について ③工具関係 ④保安委員、救護隊の取扱い ⑤配転支度金 ⑥賃金について（平和砦在籍者の賃金を 8 円支給する） ⑦移転手当……等々を決め配転作業を開始した。

橋立坑終堀にともなう平和砦への第 1 陣（37 年 2 月 1 日）を皮切りに順次配転作業が進められ 38 年 5 月 2 日 松島坑の配転を最後に完了したが、その最終人員は次の通りである。

平和砦配転者	558 名
夕張二砦	71 名（連帯含む）
清水沢砦	68 名

森林工業	24 名
北量産業	43 名
新夕張残留	66 名

(数字には経担者，職員は含まず)

以上の通り 5 月 2 日に配転した後新夕張炭鉱労働組合は 5 月 26 日解散大会を開催した，が解散大会の主な議案は以下の内容。

- 1，財産処理に関する件
- 2，表彰に関する件
- 3，組合解散決議に関する件

この決定にもとづいて 記念品（茶器一式，手帳，皮バンド）と解散記念誌「新夕張と共に」が発刊された。

又，労使による終掘記念行事は 6 月 2 日昭和グラウンドで開催され，最後は盆踊でしめくくるという型破りの閉山式となった。

閉山式次第

- ① 北炭社歌合唱
- ② 開会の辞
- ③ 殉職者への黙祷
- ④ 第 3 砦砦あいさつ
- ⑤ 新夕張労働組合委員長あいさつ
- ⑥ 来賓祝辞（4 名）
- ⑦ 功労者表彰，代表答辞
- ⑧ 誓いのことば
- ⑨ 配転者代表あいさつ
- ⑩ 閉会の辞
- ⑪ シホロカベツの歌合唱

第 2 部は慰安会

五、残炭処理で新会社設立

終堀後の残炭処理を新会社でやりたいと会社から提案があった。

北炭労連は第 6 回幹事会でこれを検討した結果，(1)産炭地域の雇用拡大（特に中高年令層の拡大）を図って新職場を造成すること，(2)長い伝統と歴史のある新夕張地域で，立鉱と共にありたいとする従業員感情が極めて強く残留を希望する者も多数ある，(3)終掘にともなって地域住民，商工業者に対する経済的影響が大きい，(4)残炭量も多小あり経済的見地により現有施設によって資源の確保を図ることが望しい……等の理由により，安定職場の確立と健全経営を指

標として「新夕張炭鉱株式会社」の設立を確認することになった。但しほとんどが旧鉱採炭であるため山元労組では保安に精通する技術者を会社幹部にして絶対安全を確保することを特に強調した。配転希望者は全員配転させ、残留希望者（67 名）を中心にしてやる会社だけに、働らく条件を横すべりにし、これを守って行くならば 10 年は大丈夫だと判断して新会社が発足した。

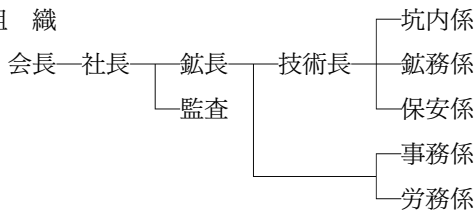
新会社の概要

(1) 商 号 新夕張炭鉱株式会社

(2) 資本金 授權資本 1,600 万円
 設立時払込資本 400 万円
 発行株式数 8,000 株

(3) 目 的 石炭の採掘及び売買と附帯事業

(4) 組 織



事務所

本社 夕張市

炭鉱事務所 夕張市末広 2 丁目 4 番地

(5) 要 員

役員 4 経理社員 5 職員 13 鉱員 136

合計 158

販売計画 新会社より北炭が買付ける

労働条件 基本的構想は北炭労使間の現行協定に準ずることとし具体的には新会社で別途協議する

以上の内容を労使が確認し、昭和 38 年 6 月 2 日付で加賀谷正照社長（閉山時の炭鉱長）、瓜田吉蔵労働組合長体制で新会社は発足した。

その後生産計画に従って順調に推移し、昭和 44 年 11 月 25 日に橋立坑が閉山（生産高 74,773 トン）し、松島坑に生産を移行して採掘していたが、昭和 47 年 4 月 17 日松島坑を閉山して（生産高 67,047 トン 人員 198 人）新夕張地区の炭鉱は全く姿を消してしまった。

閉山後の施設利用

冷水山 かつてこの地下で石炭を掘った冷水山は大和鉱業の手でスキー場が設置され、マウン・トレースイ国際スキー場として市民はじめ道内のファンに親しまれ年間 50 万人以上の観客を集めている（現在は石炭の歴史村の経営となっている）。

松島、橋立坑の繰込所はスキー場のヒュッテとして利用されている。

ズリ山がスキー場となり、かつて燃えるズリ山として唄にうたわれた二重のズリ山は焼けズリの採取場となって削りとられ昔の面影はほとんどない。

会館と安全灯（坑口浴場）は地域住民の拠点であったが、その後すっかり改造されて、宴会場、宿泊施設、喫茶店などを備えたグランド・レースイとして親しまれている。

総合集会所の前の広場は盆踊会場として有名であり、旧寮を改造した総合集会所は、その後「新夕張老人クラブ」として利用されている。

住宅のうち老旧住宅は取こわされたが大部分の住宅は一般住宅として利用されている。しかし将来計画で、ブロック住宅建設が予定されている。

六、む す び

以上のように、明治 30 年に開坑に着手してから、谷新夕張炭山、石狩石炭 KK の経営、北炭との合併、終堀後の新夕張炭鉱そして閉山と約 75 年の歴史を北炭の経営を中心にみてきたが、その特色をもう一度以下のように要約してみよう。

1、政策と災害に弱い炭鉱の体質が明らか

谷新夕張炭山（明治 35 年経営）が相次ぐ爆発（殉職者 3 名）と日露戦争後の不況の影響を受けて経営が悪化し、明治 39 年 10 月に石狩石炭 KK に経営を移管している。

更に大正 3 年 11 月 28 日に起きた若鍋炭鉱の大爆発（423 名）以降石狩石炭 KK の経営が^{たてなお}立直れない中で大正期の不況がはじまり、特に若鍋地区の連続爆発災害によって経営が圧迫されていた時に北炭に吸収合併させられている。北炭が経営に当ってからは若鍋地区を独立させているので災害も少なく、昭和初期の恐慌も何んとか切抜け（若鍋鉱は閉山）、戦時中は増産に次ぐ増産となった。

戦後は比較的安定した経営をつづけていたが朝鮮戦争によって起きた特需景気が終ると各社とも一斉に企業整備を断行し、その影響は北炭にも大合理化が発表された。その結果新夕張の一角であった厳島坑は中止された（28 年 12 月 1 日調印）。

この後は技術革新、石油に切替えるエネルギー革命の名のもとに閉山、合理化は大幅に進められ、機械化のできないヤマ、炭質の悪いヤマは真先きに槍り玉にあげられた。

このような背景の下で新夕張の終堀は鹿の谷立坑への移行を目指して検討されていた。

しかし、石炭を取捲く情勢はますます悪化し、政府も「石炭産業合理化臨時措置法」を制定して閉山、合理化を促進する政策を樹立した。加えて北炭の経営危機が叫ばればはじめ、三分離や大幅な合理化が提案され、更に追打ちをかけるように夕張二鉱の爆発がおこり、銀行融資もままならなくなった。

こうなると、条件のよい他鉱からも採掘できる新夕張鉱が攻撃されることは必然であり、鹿

の谷立坑計画を変更し、当時北炭一の出炭量を誇る夕張二砒，機械化採炭で最高の能率をあげる平和砒，第二の夕張と宣伝されていた清水沢砒に分散配転される結果になったことは必然であった。このように石炭政策と災害に弱い炭鉱の体質はそのまま新夕張砒にもあてはまっていたと判断することができる。

2. 人間関係のよいヤマであった

経営は変ったが、人の移動は少なく勤勉で人間関係が非常によいヤマであった。

その理由はたくさんあるかも知れないが以下2～3を列記してみよう。

①地形的に平地で住宅が道路を挟んで向合って建てられ(10軒長屋)，両側に水道があるため日常家族ぐるみの交流が行なわれやすい環境にあった。職員住宅も道路をへだてた近い距離にあり，職員鉱員の交流も行なわれやすかった。子供達の学校も同一で第一小学校一つであった

②このため職場においても人間関係が非常によく，チームワークの必要な職場づくりに役立って旧坑採炭，立層採炭，10尺総払いなどの難関を克服している。

③交流の場としてスポーツなども大いに役立っていた。1時期夕張を代表するグラウンドであった昭和グラウンドも，昭和6年坑内労働が終ってから労力奉仕で完成させたものであるし，ここで行なわれる従業員慰安運動会や各部落で行なわれる運動会や新夕張神社境内で行なわれる相撲大会などは戦前からつづいた代表的なスポーツであった。

又，新夕張の野球部は夕張を代表して炭鉱野球大会にもしばしば出場した。この選手も職鉱員の別はなく，選手派遣のカンパ活動も労職使の一体となった活動が展開されて成果をあげていた。

戦後は特に多くのスポーツや文化サークルを通じて交流の場が多くなりまとまりやすい要素がつくられていった。

④1,000－1,500名規模のヤマでしかも，東北出身者が多くその大部分が縁故を頼っての入山者やその子弟が多かったせいだ。〇〇県人会の活動も活発であった。

このような環境にあったのでヤマ全体のまとまりはよかった。

しかし良い面だけでなく，悪く作用する面もあった。〇〇一派にいらまれたら，ヤマの花形であった採炭などの高賃金の職種には廻してもらえず，同職種でも良い現場は与えられず，賃金も引上げてもらえない等の差別も行なわれた。「にわとり1羽に酒1升」という言葉がささやかれたのは上司を含めた〇〇一派の親分衆に対するつけとどけが行なわれていたことを示すものであった。

⑤こうした悪習慣をなくしていったのは，戦後結成された労働組合が民主的な運営に慣れてくる20年代の後半からであった。

すなわち職種を決めるのに立会い，賃金配分を職場委員会内部の査定委員会で行なうようにしたことやロング長を公選にしたこと，その土台となった「自由にものが云える職場づくり」職場討議，職場闘争の推進であったことは事実であった。

又、労働組合や主婦会が中心になって進めた「生活刷新運動」や班常会の開催などは会社側を含めて終堀を向えたヤマの団結を一層強固なものにしたと云えるのではないだろうか

機関運営の民主化も特筆すべきことである。終堀配転で他鉱に所属した時「お前の所は支持している幹部になぜあんなに文句を云うのか」といわれたことがある。すかさず「信頼しているからこそ意見を出して、他の幹部にも聞かせているのだ。それが新夕張の機関運営だったんだ」と答えたらびっくりしていた。

口角泡を飛ばす程議論しても、食事の時間になると輪になってお互のおかずをつつきながら和気あいあいとできる雰囲気は、徹底的な議論するから決定に対してすなおに従えることになるのだろう（感情を残さない運営）。

3、古きよき時代の典形

昭和 31 年に 841 炭鉱あったヤマが次々と閉山、合理化の嵐に見舞われ、三池闘争が終結した昭和 35 年からはセキを切って流れる水のような勢いで閉山が行なわれ、新夕張が終堀した 38 年にはわずか 436 山になって多くの炭鉱労働者が失業の巷にほうり出された。

北炭も万字、美流渡、赤間の 3 山分離（35 年 11 月）、神威鉱の閉山をはじめとする大合理化が提案されるなど「スクラップ・アンド・ビルト」の進行する中で新夕張終堀問題は進められていた。

予想されていた終堀ではあったが、石炭情勢はあまりにもきびしかったため大きな不安が収まっていた。

この不安を取除くために労使は真剣に対応した。北炭労連長期対策委員会が中心となって会社との協議、団体交渉は 1 年以上つづけられ昭和 36 年 11 月 10 日に協議がまとまった。

38 年 5 月 2 日に全員配転が完了するまでに整理統合部門は順次次のように進められた。

新夕張交換台の夕張統合（36 年 1 月 16 日）

自衛消防の公設移管（36 年 7 月 1 日）

北炭建設 KK へ土木移管（36 年 1 月 4 日）

分配所の生協へ統合（37 年 3 月 4 日）

北星産業 KK の設立（38 年 1 月 29 日）

中央木挽場の森林工業 KK 移管（38 年 4 月 1 日）

新夕張炭鉱 KK の設立（38 年 5 月 14 日）

（希望者の移管）

こうして非常にきびしい情勢下でありながら 1 人の首切りも出さず希望者全員を配転させることに成功した。

この背景には「重役会議が 1 山の問題で 2 日もかかったのは異例のことである」と当時云われたように「まとまりのよいヤマだからなるべく分散させないように」との配慮から時間をかけたものといわれている。当時の役員の中に新夕張経験者が 7 名（18 名中）もいたことが前述

の発言になったのかも知れない。配転者はもとより関連会社へ移管された者もほとんど労働条件を現行のまま移管することができた。このため交渉が難航してストライキ指令を出すこともなく、交渉経過を炭労に報告するだけで中闘の確認を得たことも、いかに炭労の方針によって交渉を進めたといえ当時としては異例の出来事であった。

又、平和砦配転者の賃金が16円余高かったがこれを現状通りとし、低い平和砦を1人平均8円の額を上げすることで決着した。この他特労賃金なども現状通りとすることができた。これは362名の配転で約3倍の人員の賃金を8円あげたのだから年2回の賃上げをやったと炭労内部でも高く評価された（当時は各資本とも賃金手当の切下げを実施していた）。

これは、橋立坑が終堀配転して約1年間松島坑が配転するまで新夕張労組組合員として平和労組と共闘を組んでねばり強く交渉した結果であり、現在の石炭情勢では想像もできない大きな成果であった。

又、閉山行事に配転者全員（家族ぐるみ）が参加して思出の昭和グランドで行われたが、その際多くの来賓に落涙されながら開催され、表彰や誓いのことばなどを確認しながら新夕張伝統の盆踊で終了したことも異例中の異例であった。現在でも盆踊は新夕張人の心のよりどころとして事ある毎に踊りつがれている。

最後に組合解散記念誌を（A5版875頁）従来の組合誌的なものから地域の生活誌的内容で発刊したのもこの組合ならではの功績である（詳細は「新夕張と共に」参照）。

ともあれ古き良き時代の思出であり、北炭の現状や第8次政策で石炭産業が産業ぐるみ撤退を余儀なくされている現在では想像することもできないものである。次に閉山時の「誓いのことば」を記す。

- 一、私達の終堀配転を理解され御協力をいただいたすべての人々に心から感謝しよう
- 一、新夕張を切開いた祖父や父や兄弟の労苦感謝し、輝かしい歴史と伝統を子々孫々に語り伝えよう
- 一、石炭産業の安定と働らく者の幸せのためにあらゆる人々と力を合わせて活動をつづけよう
- 一、新しい職場で「新夕張の灯」を消すことなく、みんなと仲良くして頑張りつづけよう

第二編 北炭平和砦労働組合時代

- 一、若鍋炭鉱の大爆発と閉山
 - 1、沿革：谷→石狩石炭（新夕張二坑、三坑）—北炭（若鍋炭一坑の名称変更）—閉山
 - 2、位置と地質
 - 3、生産のうつりかわり
 - 4、大爆発の発生で北炭と合併
- 二、平和炭鉱の開坑と発展
 - 1、開坑の背景と名称
 - 2、位置、地質、炭層

- 三、機械炭砦で生産増強
 - 1、採炭の機械化と生産の足どり
 - 2、運搬、選炭のうつりかわり
 - (1)切羽運搬 (2)その他運搬 (3)選炭機と銘柄
 - 3、出炭・人員・能率の推移
- 四、縮小から閉山
 - 1、1区終掘、2区へ統合
 - 2、坑内火災の発生
 - 3、深部移行で条件悪化
 - 4、閉山提案と新鉱移行準備
 - (1) 閉山提案 (2) 通産省調査団 (IE) の調査 (3) 自走枠の導入
 - (4) 新標作の実施と山元ストライキ (5) 閉山交渉と協定内容
- 五、生活
 - 1、福祉厚生
 - (1)住宅 (2)若菜市街 (3)賃金と生活 (4)医療 (5)冠婚・葬祭 (6)平和砦坑口神社 (7)葬儀
 - (8)結婚式
- 六、閉山で新鉱移行
 - 1、夕鉄労組との共闘
 - 2、組、下請労働者の条件闘争
 - 3、新鉱構想の提案
- 七、むすび

一、若鍋炭鉱の大爆発と閉山

1、沿革

明治32年北海道庁地理調査班が発見し、札幌在住の持田辰之助が鉱業権を得たが開発に至らず、中野四郎を経て、谷七太郎に移り、明治39年「谷新夕張炭山第二坑（若鍋砦）」として本格的に開坑された。

若鍋の砦名は、冷水山（ワツカナムベ・ヌプリ）に源を発するワツカナムベツ（冷い川の流れる沢）からとったもので、鍋は火を呼ぶからとの理由で、北炭合併後に若菜辺砦に替えて新夕張砦から独立した。

主要坑は西一番、二番、斜坑、東二番坑、西新坑、三坑又は南坑で、北炭合併後に、神に祈る気持で神社名をつけ、琴平坑、八坂坑、住吉坑、平安坑と坑名を変更した。

なかでも大正3年に開坑された三坑は最も有望視されたが、相次ぐ坑内火災や爆発などで奥の方よりも早く閉坑している。

最後は、昭和初期の不況のために貯炭の山がきづかれる中で昭和5年をもって若鍋炭全山が閉山となった。

坑名	旧坑名	開 坑	閉 坑
琴平坑	西一番坑	明治 40 年 2 月	昭和 5 年 10 月
	西二番坑	〃	大正不明
	西斜坑	〃	昭和 5 年 10 月
八坂坑	東二番坑	〃	昭和 5 年 8 月
	東二番斜坑	不 明	不 明
住吉坑	西新坑	大正 5 年 5 月	昭和 5 年 10 月
平安坑	三坑（南坑）	大正 3 年 3 月	昭和元年 12 月

2，位置と地質

位置は国鉄線鹿の谷駅と清水沢駅の間点稚南部トンネル付近からワカナムベ川の上流（東方）約 2 km 地点で、新夕張第二坑と呼ばれた時期もある。

大正 3 年 3 月に開坑された第三坑（南坑とも呼ばれた）は現在の平和炭鉱砦山の東向側（国鉄線の東側）である。

この三坑のつづきは、戦雲急を告げる昭和 12 年 1 月に平和鉱として開坑されることになった。

地質は夕張層だから上層，本層，下層の三層あるが，上層（6 尺），本層（8～16 尺）を稼行し，石炭分析表は新夕張鉱に準じている。

3，生産のうつりかわり

採炭法は，露頭から直ちに炭層に沿い，或は岩石坑道を設けて残柱式採炭を行ない，その後長壁式採炭に移行した。

運搬法では坑内外の運搬は他鉱をほぼ同じく採炭場では炭層の傾斜にあわせて，自転車道や「シュート」を使用し，坑道は人力或いは馬匹運搬とした。

斜坑は循環機或は捲揚機を使用し，坑外運搬は，「ガソリン」機関車を使用した。

選炭機から鹿の谷駅までは当初鉄道馬車などを使用していたが，明治 42 年に若鍋専用線（4.8 km）が開通されたので，石炭はこの専用線で運ばれ，この鉄道には乗客も乗せることができた。

又，三坑が開坑され選炭機を設置してからは三坑専用線が敷設され，国鉄に沿って北上し，現原田フトン店裏付近で若鍋専用線に接続し，鹿の谷駅に運搬した。

大正 15 年 10 月 14 日に夕張鉄道が開通して若菜辺駅が設置されると，若菜辺駅―鹿の谷駅間は夕張鉄道に譲渡しポイントで接続していたが，いずれも若菜辺鉱の閉山によって廃止され線路は撤去された。

先進的なボーリングでモデルとなり，石狩石炭の積極的な経営姿勢はボーリングの採用と発展にも現われている。

この地域は，世界的にも有数のガス包蔵地帯だけにボーリング実施も早く（明治 37 年），数も昭和 5 年の閉山までに 34 本も実施されている。この中には後に三坑温泉開業のもととなった「覚知 1 号」も含まれている。

機械化と電化では機械の導入も早く、電気扇風機の採用、ガソリン機関車、捲揚機、循環機、選炭機械なども積極的に導入し、これ等に原動力を供給するため鹿ノ谷に発電所も設置した。

又、前述したようにガスの多いヤマだけにエジソン電気安全灯の採用も早く、大正7年にD型を25ヶ入れ、平安坑は11年、14年には若菜辺砒全部に採用し、その速さは北海道で一番だったといわれている。

労働条件と賃金などは新夕張砒に準じている。

4、大爆発の発生で北炭と合併

若鍋炭砒の爆発は三坑以来これまで4回あったが、大正3年11月27日午後3時40分頃、西第一斜坑方面に起った大爆発は、史上空前のもので一瞬にして436名の尊い人命を奪い25名の負傷者を出す大惨事となった。

この大災害は道では開道以来最大のもので、現在でも三菱方城、三井三池に次ぐ第三番目、世界でも第8位のものである。

夕張地地区は炭質が良くガスが多いため、これ以前も約50回の爆発があつてその都度尊い人命を犠牲にしてきたため、「ゆうばり、喰うばり、坂ばかり、どかんとくりゃ死ぬばかり」とか、「ケガと弁当は自分持ち」、「聞いて極楽みて地獄、殺人会社と夕天地」……等の言葉や唄が残っている程でした。

この大爆発後は、東坑や三坑、新夕張砒に人員を吸収して経営の立て直しを図っていたが、大正6年12月4日、7年3月11日、8年、9年と毎年のように爆発災害が続き、ガス山として有名となった。

二、平和炭砒の開坑と発展

1、開坑の背景と名称

若鍋砒が不況の波をまともにかぶって閉山したが、翌昭和6年9月には満州事変が勃発し、時の内閣は緊縮政策から膨張政策に転換して追加予算を実行したため軍需工業や土木関係事業は大いに活発になり、炭界に及ぼす好材料をもたらし、生産増強が強く要請されるようになった。

政府の要請をうけた石炭炭業連合会が諮問した内容のうち北炭は、昭和12年度340万トンに16年度は600万トンに、人員は12年度1,0481名を16年度末20,278名とする内容であった。この計画の中には平和、興津、赤間、天塩などの新坑開発が含まれていた。

このような背景の中で平和砒の開坑計画が含まれていた。

若菜辺砒閉山後あまり時間も経っていなかったが、採炭技術の進歩と噴出ガスの処理が可能になったとして、政府の増産要請に応えるべく昭和11年9月予算総額432万円をもって本格的に開発計画が進められた。

平和炭鉱開発の計画は、支店鉱務課の中で「若菜辺開坑計画」として進められ、翌10年には職制に編入されて独立砦となり、12年1月旧若菜辺砦三坑の川向い山復にベルト斜坑、材料斜坑、人道斜坑の3本を平行して開さくに着手した。いかに若菜辺砦時代に地質調査がほぼ終わっていたとはいえ、計画から着工までの速さは異例であった。

異例といえば、着工前に平和砦という名称がつけられたことも異例であった。

満州事変以後、日本軍国主義の海外侵略体制は急激に強化され、あの恐い日中戦争（昭和12年7月7日）を経て太平洋戦争（昭和16年12月8日）へ突入していく直前に開坑したのだから、正に風雲急を告げ、戦争反対や平和を口にする者は国賊扱いにされた時期につけられた名称だけにおどろくべき事であった。平和炭鉱労働組合解散記念誌「平和と永遠に」によれば、「若菜辺砦が爆発やガス等の災害が多く物騒なヤマだったので、再開する新しいヤマは、静かで平穏なヤマにしたい、との願いをこめて平和砦と名命した」と解説している。

若菜辺三坑を平安坑に変更した時から「平安平和なれ」という言葉があり、若菜辺砦を知りつくしていた当時の関係者、重役支店長藤井暢七郎（若菜辺砦長）、次長古谷金一郎（坑内放火事件があった当時の工手長）、本店技術課長の長屋恣（合併時新夕張砦長として若菜辺砦もみていた）……等がまとめて、当時の磯村会長に積極的に提起し決裁をうけて命名されたもので、だから邪魔が入らないうちにと急いで異例の速さで進められたものと推測される。

2、位置、地質、炭層

坑口の位置は、シホロカベツ川とワカナベ川の合流点より西側約100^{メートル}の山腹で、旧平安坑の川向側にある。地形は壮年期の地貌を呈し、山の形はさして急峻ではない。

地質的には石狩層群の下位から登川層、幌加別層、夕張層、若鍋層、幾春別的全層が発達している。

シホロカベツ川右岸平和断層西側から、西南方向に1区（坑口水準248.50^{メートル}米、傾斜24度）が開坑され、平安背斜南部東翼の炭層を稼行した。稼行炭層は平安8尺層（炭丈4^{メートル}米）、および10尺層（4～6^{メートル}米）であった。

2区は坑口水準290^{メートル}米、傾斜20度の坑区であり、採炭は平安背斜中央部の東翼の炭層を稼行した。稼行炭層は、平安8尺層（炭丈3.6^{メートル}米）および10尺層（3.50～5^{メートル}米）を採掘した。

三、機械炭砦で生産増強

1、採炭の機械化と生産の足どり

(1) 平和砦1区一断層が交錯しているため採掘には非常に苦労したところで、ガスも多く自然発火の心配もあるので盤下坑道から立入で区画し後退式採炭を原則とした。（片盤向長壁法）

ガスが多いため採炭は全部ピック掘りで切羽運搬は全部圧縮空気を使用した。

昭和26年10月カップ採炭開始と同時に払跡処理は総ばらし方式にかわった。

平安8尺層の1^{メートル}米ぐらい上にある上炭はところによって採炭できたので（厚さ1^{メートル}米前後）、27年1月から約3ヶ月間、面長70^{メートル}米のロングを作り、コール・ブラウ採炭を試み、一方の進行1.8^{メートル}米の成績をあげたこともあった。

2区の機械化やスライシング払いの好成績に刺激されて、37年に新夕張からの配転者で第3ロングで初のドラムカッターを使用し、スライシング払いを試みて成功した。この方式は39年11月16日の1区終掘までつづけられた。

(2) 平和砦2区一昭和23年8月に開さくに着手し、29年8月から営業出炭になったもので、最初からスライシング2段分層払いを行ない、後年平和砦といえばスライシング、機械採炭の高能率炭鉱で「平和に追つき、追越せ」の目標にされるヤマであった。

このヤマの10尺層は4.5^{メートル}米以上あり、炭層傾斜は8度～15度で炭質は自然発火を起し易く、天盤は頁岩で凝固し易いので人工天盤を形成し易いので29年8月の第1ロングからスライシングが採用された。

29年から36年まではピック掘りが行われたが、36年からドラムカッターが採用され、39年からは全面ドラムカッター採炭にかわった。

41年以降は更にオートフィード化、ヘリカルドラム等の使用によって近代化が一層進行した。切羽の重装備化と払面進行の速さに即応するため面支保、敷込、上添ゲートの掘進、維持がどんどん改良されていった。

ロング面の支保は鉄柱カッペの組合せで、摩擦型鉄柱は29年から38年までと最も永く、水圧鉄柱ダウテ型は36年、同フェロ型は46年から使用された。

カッペ1.2^{メートル}米は29年から38年まで、1.4^{メートル}米軽量型は36年から、1.4^{メートル}米強力型は45年から使用された。

又、自走枠（日本鉱機R.MC-23型）は46年12月試験的に採用され、その経過も良かったので48年末から北西部第1ロングおよび同第2ロングで^{ダブル}Wレンジングドラムカッターとの組合せで使用されたが、天盤状況や断層条件が悪く、単柱ロングよりも能率が低く成功したとはいえなかった。ただこの頃は夕張新鉱移行前に全採炭員に自走枠を経験させる目的もあったので自走枠の導入は間違っていなかったかも知れないが、新しい標準作業量設定協定が実施された後ただただに収入減などでもめるケースも多くあった。

上添、ゲートの維持は平和砦のように最初のゲート坑道が次のロングで上添坑道として使用されるところでは非常に重要な課題であり、機械化による切羽面の進行が早くなる程その対策が重要であり、たえず研究が繰返され終掘時には、M-75（上添）の鋼枠を使い脚部に40厘のクッションを組む方式となっていた。ゲート坑道は3部材を使用し面の前方にも拡大を行うようにした。又自走枠では面の進行が早いので、1号アーチを使用し、2^{メートル}米の手積充填の肩部に4^{メートル}米のフライアッシュ流送重填を実施するようになった。

スライシングの敷込みについて最初は木材の半割を使用した37年4月から亀甲型の金網を使用し、金鋼と金網は特殊工具で結束する方法を採用した。その方法も直角型から斜向型と

改良を加えたが、自走枠になってからは直角型に敷き、両端が15 ㎏重なるようにし、一定間隔に帯鉄を入れて縮小を防止する等の改良をつねに積み重ねていた。

2、運搬、選炭のうつりかわり

(1) 切羽運搬

最初の頃は全部エアー駆動でシェーカーコンベヤ、V型チェーンコンベヤ、ベルトコンベヤが使用されていたが、28年1区のゲートル^{ダブル}Wチェーンコンベヤが入り、29年8月から原動が電気にかわり、切羽やゲート第一運搬はほとんど^{ダブル}Wチェーンコンベヤにかわった。

47年4月に北東部第一ロングに日本ではじめてのセンターチェーンコンベヤが採用された。

ゲート運搬はほとんどダブルチェーンコンベヤとベルトコンベヤの併用だったが上下段が一度に出炭開始をするといかに威力のあるコンベヤものみきれず停止することがしばしばであった。

(2) その他運搬

ゲートから運ばれてきた石炭はポケットに搬入され、鉱車で運ばれてきたものは二函又は6函チップラーにあげられた。

ポケットからは更にベルトで集団ベルトコンベヤのポケットに搬入され、第4群、第3群、第2群を経て一群ベルトから坑外の未選ビンに搬入されここから選炭機に送られた。

2区集団ベルトのポケットは、3つあって合計1,720トンが貯炭され、坑外原炭ビン2基と合わせて3,000トンの貯炭が行なわれ5ロング分の出炭がクッションをもつことになっていた。この点が後年開発された夕張新鉱がポケットなしで苦労したことと対照的なところであった。

その他の運動は、エアータッカー、エンドレス、コース捲き、バッテリーロコ、トロリーロコ、人車捲など他鉱とほとんどかわりなかったが坑内が深部化するにともない入出坑時間を短縮するため第1マンベルト^{メートル}(735 米)、第2マンベルトマイナス100^{メートル}米から300^{メートル}米まで全長922^{メートル}米を9分で行くことができるようになっていた。

(3) 選炭機と銘柄

出炭開始から注目されていたが18年1月から平和特粉(7,500カロリー)の生産を開始し6月以降は塊炭を全量破碎して特粉と粉にし9月からは中塊も破碎し、全部特粉にした。

戦後二砒が開坑して一段と規模が大きくなるため選炭機は何度も改造された。

30年7月から新銘柄平和精選特粉(8,000カロリー灰分5%)を設定し、31年にバウム水選機+ダイスター方式+浮選機と完全な粒度別選炭方式となり日本で最も優秀な選炭工場となり、更に32年に世界ではじめてといわれる空気作動式自動研抜き装置を完成し、選炭効率の飛躍的向上をもたらした。この装置はやがて日本全国の選炭工場に使用されるようになった。

又選炭廃水によるシホロカベツ川の黒き流れは公害の規制の強化によって清澄化され48年から閉山までの選炭廃水は北東部の坑内に流入された。

表－5 平和炭鉱開坑以来の出炭・人員・能率表

(単位：トン)

年度 昭和	出 炭 (トン)			人 員 (平均在籍)			能 率		
	上期	下期	計	上期	下期	計	上期	下期	計
12						249			
13						517			
14	7,600	21,000	28,600			517			
15	79,000	74,100	153,100			517			
16	76,500	96,500	173,000			968			
17	41,200	42,100	83,300			821			8.5
18	51,400	53,500	104,900			1,021			9.5
19	68,300	85,000	153,300			1,316			9.7
20	58,200	15,300	73,500			1,136			5.4
21	23,900	28,600	52,500			1,047			4.2
22	34,400	39,800	74,200			1,249			5.0
23	43,600	48,600	92,200			1,305			5.9
24	56,700	53,800	110,500			1,028			9.0
25	57,700	52,900	110,600			1,001			9.2
26	62,600	57,000	119,600			931			10.7
27	60,700	44,400	105,100			935			8.8
28	58,200	52,700	110,900			883			10.5
29	109,600	121,200	230,800			1,198			16.1
30	122,600	122,200	244,800			1,236			16.5
31	141,400	152,500	293,900			1,270			19.3
32	177,400	169,600	347,000			1,347			21.5
33	95,000	152,400	247,400			1,393			14.8
34	191,900	201,600	393,500			1,413			23.2
35	217,700	238,800	456,500			1,325			28.7
36	261,500	312,500	574,000			1,344			35.6
37	329,600	326,000	655,600			1,540			35.5
38	438,000	502,000	940,000			1,577			49.7
39	481,200	510,500	991,700			1,557			53.1
40	414,300	545,700	960,000			1,567			51.0
41	535,200	527,500	1,062,700			1,603			55.2
42	450,400	505,500	955,900			1,607			49.6
43	284,500	358,200	642,700			1,519			35.3
44	344,300	402,800	747,100	1,399	1,385	1,392	41.0	48.5	44.7
45	357,400	331,200	688,600	1,331	1,256	1,293	44.8	43.9	44.4
46	297,500	349,968	647,468	1,233	1,198	1,215	40.2	48.7	44.4
47	298,916	273,657	572,573	1,156	1,127	1,142	43.1	40.5	41.8
48	214,386	240,000	454,386			1,066			35.5
49	281,200	281,200	537,450	971		802	48.3		55.8
合計			14,189,377						

(注) 旧平和1区出炭開始 昭和14年5月

旧平和2区出炭開始 昭和27年12月

3. 出炭・人員・能率の推移

次の表－5は平和炭鉱の出炭，人員，能率の推移である。出炭のピークは昭和41年の53万トンで，人員も1,603名に達した。尚，能率は機械化炭鉱から55トンをあげ，高所得の源泉となった。

四、縮少から閉山

1、1区終堀、2区へ統合

昭和29年8月1日それまで16億3,000万円をかけて準備をつづけてきた第二炭砦がはいよいよ開坑にこぎつけた。閉山した角田砦や穂別砦、それに真谷地、登川からの人員補充を行って出炭を開始した。

表-5でみるように28年度出炭11万900トン、人員883名、能率10.5トンが30年には出炭24万4,800トン、人員1,236名、能率16.5トンと飛躍的に向上し、重装備機械化炭鉱として他山から「平和に追つき、追越せ」と目標にされる程の近代炭砦となり北炭を支える優良な炭鉱に成長しつづけた。

しかし1区が深部化しガスも多いことから36年の北炭長計で37年には1区を終堀し、2区に統合することになっていた。

新夕張の終堀で橋立坑からの配転者で1区を稼行していたが、第2次長期計画で39年下期中に2区に集結することになり、39年11月16日遂に終堀した。

1区は昭和12年開坑以来37年間で2,802,750トンの出炭を記録して長い歴史の幕を閉じた。

1区、2区の統合によって機構の一部がかわって採炭係長と開さく係長となり、坑内職種も一本化し交流を行なった。取りあえず高職種に68名職変した。職場条件統一及び作業内容については支柱員は全員請負支柱員とすることに決定した。

この頃から北炭の経営危機が叫ばれ、職場の統廃合や職場規律の確立などが提案されるようになった。

又、石炭政策闘争も活発となり国有化闘争と攻転政策へと発展していくことになった。

2、坑内火災の発生

43年7月30日午前3時50分頃（三番方）平和砦2区西部ベルト斜坑第2原動付近（坑口から2,200^{メートル}米）で坑内火災が発生し、31名の尊い殉職者を出した。

災害発生時この方面には65名（鉱員58名、職員7名）が配番されていたが、34名が自力で脱出したが、残りの31名が行方不明となった

発生後直ちに友山の応援を含めた救護隊が出動し、風管通気で入排気側から救出活動を行ったが9遺体を救出した時点で煙と高温のため前進できなくなった。

張分けと電気局扇を併用して、522^{メートル}米まで前進した（世界最長記録）が、その先133^{メートル}米で温度100度以上、メタンガス10%、炭酸ガス3%、青色の煙もあるので火災はまだ続いており2次災害のキケンもあるので救出活動を断念し、入気側を水封することにした。

更に排気側の偵察で火源があると推察されたため22名全員の死亡が宣告され密閉作業に入った。

30日は合同慰霊祭が行なわれ、11月27日注水も完了した。12月2日から水抜き作業も開始され四交替で取明作業を開始した結果、7月3日全体遺体を収容して取明作業を終了した。この災害で殉職者31名、入院患者2名、1ヶ月以上の休業者6名、1週間以上休業者2名及び以下32名があった。

又、備付用のCOマスクが全く使用されておらず、この災害を契機にCOマスクの個人携帯、誘導無線の導入が保安対策として決定された。

又、原因について組合側は、「第2ベルトの片寄りによりこぼれた炭が伸張器に集まりこのためベルトがスリップしラッキングドラムのゴムとベルトの摩擦による過熱で発火したものである」と推定した。尚このベルト運転手は2原動を一人で受けもっているため入気側の第1原動にいたため発火には気がつかず自動停止装置も作動していなかった。この火災事故が平和砦の運命を決める原因となったのである。

3、深部移行で条件悪化

40年代に入って炭労が国有化闘争を進めたが閉山の嵐はますます強くなり、中小炭鉱から大手へのひろがりをみせはじめてきた。

44年度中北海道だけで22炭鉱、7,135名の仲間が失業の巷に放り出され、夕張でも橋立、遠幌、北夕の3山の灯が消された。

生き残るための無理な作業体制や合理化は必然的に災害の増加となってあらわれ、北海道だけで119名もの死亡事故があった。

43年の平和砦坑内火災はこのような時期に起こり、その後も北炭の災害はふえつづけたので、離山ムードに拍車をかけ人手不足を生み、出炭減、資金づまりをきたして北炭の危機がうわさされるようになった。

こうした中で44年12月8日北炭の緊急労使協議会が開催され、萩原会長が自ら社長に復帰して機構改革、安定出炭の確保、組合への協力要請が出された。

一方平和鉱においては災害を契機に坑内のガス抜きや準備作業のおくれが目立つようになった。

労働力の定着性を高めるための「定着奨励金制度」、労働力の体質改善やヤマを守る運動としての「地区対抗青少年駅伝競走」、「ヤマを守る大運動会」、「停年退職再採用」などを打ち出したが大きな効果はあがらなかった。

坑内の深部化によって、地圧が強く、盤ぶくれや坑道維持に大幅な人手がかかり、掘進中の坑道で石炭が飛び出すなどの現象もみられるようになった。又、通気上の問題や高温対策、ガス抜き対策、急傾斜採炭、断層の変化など自然条件が悪化してきた。

もちろん主管の統合や採炭の大番割、自走枠の導入、FA^{フライアッシュ}流送充填の採用、部落集約などを大胆に行って対処したが自然条件の悪化を克服することはむずかしかった。

4、閉山提案と新鉱移行準備

(1) 閉山提案

45年5月26日開催した北炭の特別労使協議会は、前年の機構改革や子会社の総売上額500億円が石炭(317億)を上まわり、2月3日には夕張新鉱開発計画が発表された事などによって近く北炭に大規模な閉山合理化がくるのではないかと注目されていた中で開催された。

会社提案の骨子(関係分のみ)

- ① 夕張二鉱は47度初に閉山し、人員は一鉱平和、清水沢、真谷地に配転する
- ② 平和鉱は48年上期に閉山し、全員新鉱に移行する
- ③ 清水沢鉱は48年下期に閉山し、全員新鉱に移行する

新鉱は年産150万トンの規模にする。

以上のような山元の労働者も地域住民もびっくりするような大規模な閉山提案で北炭ショックという言葉を生み、夕張の随所に大きな影響を及ぼすことになった。

平和鉱の4,000トン計画に乗った夕張鉄道も合理化を余儀なくされ、旅客列車の全面廃止、学校の統廃合、夕張のまちづくり10ヶ年計画も白紙同然となり、商店街も途方にくれるありさまであった。夕張地区が石炭のモノカルチャ構造(コロニー)を地域の産業構造にしていることが夕張地区の全面崩壊を必然化することになることが、このことはこの北炭ショックの中に込められていた。

北炭労連と平和労組は以後この問題を中心に据えて調査や交渉を行ってきたが、その結果、46年6月20日の臨時大会で閉山と新鉱移行を次の通り確認した。

- ① 長期安定、安全職場の確保は、現在の平和炭鉱では実現できない。したがって48年下期の新鉱移行を認めざるを得ない
- ② 新鉱移行にあたって当面の基本的な要求として次の3点を勝ち取ることを掲げた。
 - イ、完全雇用(準備員を含む)
 - ロ、労働条件は現行を最低として引下げを行なわせる
 - ハ、昭和48年移行時までの安全職場の確保、営繕予算の削減はおこなわない

以上の方針で山元、北炭労連、炭労が連携しながら新鉱移行までの対策をすすめていく事になった。

(2) 通産省調査団(IE)の調査

深部移行によって諸条件が悪化し能率が低下した平和炭鉱の実体調査するため46年春に北炭内部で「平和炭鉱実体調査委員会」が設置され調査が行なわれた。

引きつづいて通産省の申入れでIE調査団が8月9日から9月3日まで張付調査を行ない問題点を提起した。

47年1月17日から10日間前回の追跡調査を行ってその結果を「平和炭鉱改善調査報告」として総論、保安確保、作業工程、チームワーク、設備管理に細かくまとめて労使に報告した。

これらの調査は平和鉱そのものよりも、多額の投資をして開発する夕張新炭鉱が平和鉱から

の移行者でやっていけるかどうかを調査したもののようで「これで新鉱へ行っても充分やっていける立派な技術であり、労働者であることを調査団として認め感謝します」と講評していることから裏付けられているようであった。

(3) 自走杵の導入

自走杵とダブルレンジングとドラムカッターの組合せによる大型機械切羽の設定も移行準備の一つとして行なわれたようだ。

会社は自走杵現場は配番を全体の選抜チームで実施したいと提案し、組合は、移行する前に全員に自走杵を習得させたいというなら終掘ロングを優先すべきだと主張した。

結局準備は選抜で行ない、試験稼行は終掘ロングで行なわれた。すなわち、北西部第一ロング、北東部第一ロング、北西部第二ロングを稼行し全採炭員が自走杵を体験した。移行のためとはいえ、断層が多く急傾斜や炭丈が薄くなるなど自然条件が悪くなってからの導入では効果も少なく、新標作決定後であったため、賃金取扱いなどで内部困乱を起し、単柱ロングより能率が低かったのは大きな反省点であった。

(4) 新標作の実施と山元ストライキ

北炭ショックの言葉が生れた45年の閉山合理化につづいて46年下期労使協議会で会社は「今や当社は創業以来最大の危機に際会し、正に明日をも測り知れない最悪の事態に直面し、この危機を乗り切るために計画出炭の達成以外にない」として、「請負給の形態並に標準作業量に関する提案」を行ってきた。

北炭労連は合理化であるとの判断で炭労の指導をうけ24時間ストで撤回をせまったが、48時間ストを背景に「北炭のおかれている情勢はきびしく、当面閉山を阻止するためにある程度の譲歩は止むを得ない」との判断で妥結した。

この新標作は、請負給者の本人給付は請負制とし20%を全鉱標作、80%を切羽標作に対して支給するというもので、翌日にならなければ賃金が判らないというものであった。又、自然条件の悪いヤマは賃金が下廻るため現場での評判は悪く、平和炭鉱では全鉱標作の改訂を要求して3日間山元ストを決行する事態がおこった。

協定の内容次の通り結ばれたが、貴重な資料なので長文であるが以下に掲げる。

「 協 定 書

北海道炭硯汽船株式会社と北海道炭硯汽船株式会社労働組合連合会とは、労使相協力し、日産15,000トン以上の出炭を確保することを前提として請負給の形態並びに標準作業量に関し下記の通り協定する。

記

1、請負給の形態

(1) 請 負 給

① 請負給を支給する作業は次の通りとする。

イ、採炭作業

ロ、掘進作業

ハ、拡大支柱作業

② 請負者の本人給は全請負給制とし、その 20%を全鉱標作（トン/日）にその 80%を切羽標作（トン/人）に対して支給する。

③ 請負給の遂行率と支給率は 1 対 1 とする。

(2) 精励手当

請負給者が切羽標作を遂行した場合には、当日作業に従事した者に対し次の金額を支給する。（日額）

イ、採炭掘進作業 350 円（税込）

ロ、拡大支柱作業 300 円（税込）

2. 標準作業量

(1) 全鉱標作

① 全鉱標作は全鉱ロング出炭に掘進炭を加えたものとし（請負炭を除く）次表の通りとする。

② 全鉱標作は採炭・掘進並びに拡大支柱に適用する。

期間 項目 炭鉱別	47 年 3 月		47 年 4～5 月		47 年 7 月以降		備 考
	出炭 (トン/日)	ロング能率 (トン/人)	出炭 (トン/日)	ロング能率 (トン/人)	出炭 (トン/日)	ロング能率 (トン/人)	
夕張炭鉱	1,900	982	2,430	1,127	3,280	1,388	4 月 2,330 トン
清水沢炭鉱	1,530	977	1,530	977	1,670	1,084	
平和炭鉱	2,250	992	2,250	992	2,460	1,031	5 月～6 月 1,960 トン
真谷地炭鉱	1,470	800	1,880	805	1,640	841	
幌内炭鉱	4,430	1,322	4,430	1,322	4,580	1,364	
計	11,580	1,066	12,220	1,084	13,650	1,180	

(2) 切羽標作

イ、採炭作業

全鉱ロング出炭およびロング能率を各切羽に展開し、その 1 人当り能率を各切羽の標作とする。

ロ、掘進作業

従来の実績を勘案の上山元において各切羽別標作につき別途協議

ハ、拡大支柱作業

掘進作業に同じ

(3) 標準遂行率

全鉱標作並びに切羽標作を遂行した場合の遂行率は採炭・掘進作業については 142%とし、拡大支柱は従来通りの取扱いとする。

3. 出炭奨励給

(1) 炭鉱長所属の鉱員

全鉱標作を達成した場合には当日の作業区分に従い下期金額（日額税込）を支給し、さらに全鉱標作を越えた場合 1%刻みで下期金額の 10%（税込）を加給する。

(2) 炭鉱長所属外の鉱員

該当炭鉱が全鉱標作を達成したとき 50 円（日額税込）を支給し、さらに全鉱標作を越えた場合 1%刻みで下期金額の 10%（税込）を加給する。

種別 坑内 外別	作業内容	金額(円)
坑内	A 採炭, 掘進作業	300
	B 場内作業, 拡大支柱, Aに直給する運搬	200
	C その他	150
坑外	A 現業	100
	B その他	50

4. 実施期日

昭和 47 年 3 月 1 日より実施する。

昭和 47 年 2 月 22 日

北海道炭鉱汽船株式会社

取締役社長 萩原吉太郎

北海道炭鉱汽船株式会社労働組合連合会

会 長 橋本 俊隆

諒 解 事 項

北海道炭鉱汽船株式会社と北海道炭鉱汽船株式会社労働組合連合会とは昭和 47 年 2 月 22 日付請負給の形態並びに標準作業量に関する協定書の細部取扱いに関し左記の通り諒解する。

記

- 故障, その他により切羽並びに全鉱標作が遂行されない場合の遂行率はそれぞれの標作に対応する当日の実績遂行率とする。但しそれぞれの標作に対応する当日の実績遂行率が本人給に見合う遂行率を下回るときは本人給に見合う遂行率を補償する。
- (1) 故障, その他により請負作業が続行できず, 係員の指示により 2 時間の残業を限度として, その復旧に努力した場合は, 当日の実績遂行率 (本人給に見合う遂行率を下回るときは前記 1 の但書による) と精励手当を支給する。
(2) 故障, その他により請負作業が続行できず, 係員の指示により他の作業に就業した場合の遂行率は当日の実績遂行率 (本人給に見合う遂行率を下回るときは前記 1 の但書による) とする。
(3) 故障, その他により請負作業が 2 時間以上中断した場合は 2 時間の残業を限度として請負作業の遂行に努力するものとし, 標作が遂行されない場合は当日の実績遂行率 (本人給に見合う遂行率を下回るときは前記 1 による) と精励手当を支給する。
- 新切羽の標作設定は切羽稼働前に行なう。
- 採炭作業の請負給を支給する作業は, 採炭切羽より別表の作業を除外したものとする。
- 請負給者が一時転業により日役作業に従事した場合の支給率は, 採炭掘進作業員については 125%, 拡大支柱作業員は 115% として, 精励手当は支給しない。又一時転業により他の請負作業に従事した場合は行先遂行率を支給する。
- 場内請負給者には従来の切羽内作業手当を支給しない。
- 全鉱標作は次の場合に限り修正するものとする。
(1) 新たに自走杵, ダブルレンジングドラムカッターを導入した場合
(2) 計画に基づく大幅な配置転換を行なうとき
(3) 保安上採炭計画に変更が生じ長期にわたり全鉱出炭能力が全鉱標作を下回るとき
- 昭和 26 年 4 月 2 日付賃金協定書記 2 の(1)の三請負給および昭和 44 年 3 月 31 日付確認書ならびに同諒解事項は廃止する。
- 請負給取扱いに関する従来の山元協定解釈並びに諒解事項は廃止する。

昭和 47 年 2 月 22 日

会社 労連

覚

北海道炭鉱汽船株式会社と北海道炭鉱汽船株式会社労働組合連合会とは昭和 47 年 2 月 22 日付け諒解事項の取扱いに関し左記の覚を取交す。

記

- 1, 記 5 関係 職種間の不均衡を是正するため職種変更について山元協議の上実施する。
- 2, 記 7 関係 長期に亘り全鉱標作が達成されないときは会社, 労連間で協議する。

昭和 47 年 2 月 22 日

会社 労連

以上の外, 細部取扱い, 山本の細部取扱いがあるが省略します。

尚その後労連の標作見直し交渉が数回行なわれて数字面, 取扱い面で若干の変更がありましたが紙面の都合で割愛させていただきます。」

(5) 閉山交渉と協定内容

平和労組が移行を確認し交渉を進めている 48 年 7 月労使協議会で「夕張一鉱を閉山して 8 月から 12 月まで夕張新鉱に移行する」と会社が提案した。北炭労連や炭労対策委員会で検討し調整を測った結果, 炭労, 道炭労, 北炭労連, 平和, 夕張による対置要求作成小委員会が設置され具体的な作業に入った。

24 時間スト, 48 時間スト, 北炭全体の 24 時間ストライキを繰返し決行したが, しかし 9 月 22 日了解点に達し妥結した。その条件は, 前に閉山した三菱大夕張炭鉱を上まわるものであり, 当時としては炭労で最高の条件であった。これは 9.22 協定といって高く評価された。

9.22 協定の内容は次のものである。

「9.22 協定の大綱

協 定 書

北海道炭鉱汽船株式会社と日本炭鉱労働組合及び北海道炭鉱汽船株式会社労働組合連合会とは, 夕張一鉱及び平和炭鉱に在籍する鉱員（準備員を含む）の夕張新炭鉱移行に関し下記の通り協定する。

記

1, 移行計画

移行計画は, 別紙(1)の通りとする。

2, 完全雇用

- (1) 坑内員については, 完全雇用とする。
- (2) 坑外員については, 関連企業の雇用を含めて完全雇用を達成する。

3, 解雇時期

- (1) 夕張一鉱在籍鉱員（準備員を含む）は, 昭和 48 年 9 月 29 日付を以って全員解雇する。
- (2) 平和炭鉱在籍鉱員（準備員を含む）は, 昭和 50 年 3 月末日を目途として全員解雇する。

4, 移行時期

- (1) 夕張一鉱在籍鉱員（準備員を含む）は, 昭和 48 年 10 月 8 日より同年 12 月までの間に, 逐次夕張新炭鉱に移行, 採用する。

(2) 平和炭鉱在籍鉱員（準備員を含む）は、昭和 48 年 10 月 8 日より昭和 50 年 7 月までの間に、逐次夕張新炭鉱に移行、採用する。

5、閉山時期

夕張一砦及び平和炭鉱は撤収作業完了後それぞれ速かに閉山する。

6、移行者の取扱（鉱員）

夕張一砦及び平和炭鉱から夕張新炭鉱への移行、採用する鉱員の取扱は、別紙(2)の通りとする。

7、移行しない者の取扱（鉱員）

已むを得ない事由により、夕張一砦及び平和炭鉱から夕張新炭鉱へ移行しない鉱員の取扱は、別紙(3)の通りとする。

8、準備員の取扱

準備員の取扱は別紙(4)の通りとする。

9、夕張新二砦へ移行する坑内員の取扱

夕張一砦から夕張新二砦へ移行、採用する坑内員の取扱は別紙(5)の通りとする。

昭和 48 年 9 月 22 日

北海道炭鉱汽船株式会社

取締役社長 金 谷 正 二

日本炭鉱労働組合

中央執行委員長 里 谷 和 夫

北海道炭鉱汽船株式会社労働組合連合会

会 長 橋 本 俊 隆

別 紙(1)

移 行 計 画

- 1、昭和 48 年 10 月の夕張新炭鉱への第 1 次移行人員は夕張一砦から 228 名（坑内員 220 名、坑外員 8 名）、平和炭鉱から 50 名（坑内員 50 名）、合計 278 名（坑内員 270 名、坑外員 8 名）とする。
- 2、昭和 48 年 10 月、夕張一砦から夕張新二砦に 60 名を目途として移行、採用する。
- 3、夕張一砦の回収作業人員中、一部は夕張新炭鉱に逐次移行し残人員は一時夕張新二砦で稼働、夕張新炭鉱に逐次移行して所要人員を確保する。
- 4、平和炭鉱から夕張新炭鉱への第 2 次移行の以降は、夕張一砦からの移行完了後逐次実施し、夕張新炭鉱の所要人員を確保する。

以 上」

五、生 活

ここでは平和炭鉱の生活を明らかにするが、新夕張鉱と同様にモノカルチャ構造を基盤にする北炭城下町の構造と共同体社会を特徴にしている。

1、福祉厚生

(1) 住宅

登川村当時は現在の第一中学校から国鉄線トンネル南側鉄橋付近までが鹿ノ谷であったが、若鍋炭鉱が開坑されてから、夕張営林署の沢から南が若鍋となり、炭鉱が名称をかえたため若菜辺となり、昭和 17 年 4 月から若菜となった。

平和開坑当時は若菜辺の中に私称で日の出町（現在の平和1区）、千代田町（千代田1、2区と中央社宅）、寿町（平和1区3区）と呼ばれている。住宅建設も日の出町が一番早く、つづいて千代田町、寿町と腰折屋根平屋建碁員住宅が建設され部落が形成され所謂炭鉱村を形成する。

17年4月の改正で正式に千代田、平和（平和炭鉱の所在地で通称として平和と呼称されていた）、若菜が字名となった。

この時同時に国鉄線より冷水山側は常盤、日吉の地区である。

字名の改正にともなって会社も連絡所名を改称したが、寿連絡所だけは化成工業所の管轄だったので、29年角田碁からの配転を迎え入れる時に平和3区と改称した。

千代田3区は21年から炭住資金による2戸建住宅が建てられて連絡所が設置された。その後1号、2号、3号、5号アパートが28年に、10号館が36年に、そして12号館が41年に建設された。千代田1区2区方面は、22年に日鋼移設住宅3棟12戸、炭住2戸建12棟、29年に厚年融資4戸建を建てて、骨格構造を整えた。

(2) 若菜市街

炭鉱の盛衰と共に周辺市街地も運命を共にすることが、若鍋碁の閉山によって、30戸もあった若菜辺沢の市街地が皆無になり現在の市街地に移動したことをみても明らかであり、炭鉱の共同体＝村の運命であった。

平和炭鉱の開坑によって発展した若菜市街は、閉山によってどう変わるか？ 炭鉱の不況が叫ばれただけで医院や薬局など従業員と密接な関係ある商店がどんどん減っていくが、産炭地振興、閉山跡地再開発で労働組合も地元町内会も市当局も真剣に努力を重ねて炭鉱の共同体＝村の維持に全力を注いだ。この地域での主な建物況は次のものがある。

若菜小学校が現在地に移ったのは昭和11年12月22日である。

夕張製作所（現北炭機械）は13年3月、化成工業所は12年に設置された。夕張鉄道の開通にともなって若菜駅が大正15年10月に開設、昭和50年3月に廃止された。他方13年6月には若菜辺平和碁に請願巡査1名が配置された（若菜警察部長派出所）。

若菜郵便局は14年12月26日に開設され、消防署は15年設置された。学制改革によって千代田中学校が新しく誕生した（24年11月14日）。

25年には夕張～若菜間にバスが走るようになり、バスターミナルが若菜におかれた。

平和碁の発展に伴って学童が急激にふえたので29年11月16日若菜東小学校ができた。

31年8月には夕鉄営林署前駅ができ、41年には新千代田住宅地を割って夕張隧道ができ47曲りで有名な二股峠は廃止された。市役所の若菜支所は24年10月から開所され今日に至っている。

閉山直後の若菜市街現況（51年5月末）は次の建物、施設を中心に行っている。

衣料品販売店7軒、食品販売店7軒、理容院4軒、飲食店9軒、薬品店1軒、菓子店4軒、荒物雑貨店4軒、家具販売1軒、時計店3軒、文房具店1軒、医院2院、はきもの店1軒、自転車店1軒、電気器具店3軒、印刷業1軒、鉄工所2軒、請負業6軒、パチンコ店2軒、牛乳

販売店 2 軒，その他 4 軒 合計 65 軒

若菜町内会の役員 会長柳沼三郎，副会長小倉茂喜，佐々木進雄南義雄，会計内潟，庶務石井，商工荒井，文化厚生本木，交通本木，感謝西脇，火防衛生山田，婦人佐々木，青年西村＝以上部長

若菜支所管轄の世帯・人口 49 年 12 月末 2,258 世帯，7,598 名，51 年 5 月 1,792 世帯，5,763 名。

(3) 賃金と生活

戦時中の賃金および生活については古老の語るところによってふりかえってみることで再現すると以下ようになる。

政府の物価対策として 14 年 1 月に賃金統制令が発令され，9 月には臨時措置令が発動されたが，15 年 10 月に前二者の精神を一本化した第二次賃金統制令が発動されて全面的な統制が行なわれた。

この統制下で，機械・工作・電工・選炭・雑夫及び運搬・支柱の一部は**日額払い**，他方堀進，採炭及び支柱・運搬の一部を**稼高払い**とすることが定められた。

17 年には初給賃金の最低保証額が規定され，19 年の賃金規則から日給・保証給・請負給の表現が用いられた。

19 年度の最高制限額（便宜上 20 才のみ）は坑内外別で次のような金額であった。すなわち，坑内男子 日給者 3 円 20 銭，請負給者 4 円。坑外男子 2 円 30 銭，坑外女子 1 円 31 銭（出稼賞与，勤務手当，家族手当あり）。

このような賃金制度のなかで休むことなく職場に刈出され，生活はほしがりません勝つまではの標語に代表されるように徹底した統制のもとでの耐乏生活が強要された時代であったが，買物するのに七分証明制度（操業証控をもって分配所で商品購入か現金化する制度）があった。

戦後は買出しのため竹の子生活がはじまり，飢えに苦しんだ。

炭鉱が他産業より優遇され，加配米の特配やリンク物資などがあったがインフレによる物価の急騰には追いつけず，年 2 回の賃金闘争や臨時給与（飢餓突破資金等）を要求して闘い，この中で労働組合も民主化されていった。

ここに採用から停年まで丹念に賃金カードを書き残していた佐藤重夫（支柱一採炭で 43 年停年退職）の資料から，採用時と退職時の平均的な月を選んで比較してみると飢えの時代が次のように窺える。

23 年に 5,000 円台だった総収入が 20 年後には約 13 倍の 6 万 6,000 円台になっている。平和砦での 50 年 1 月の採炭平均は 19 万 6,000 円（坑内外平均 15 万 4,000 円）となり，比較すると約 40 倍になっているが，物価指数はそれ以上になり作業密度も強まっている。次の表－6 は 23 年の 2,035 円と 43 年の 42,265 円の月給額であり，高能率による高所得になっていることが窺え，炭鉱生活の黄金時代を現わし，炭鉱村の幸福な時代であったと云える。

表－6 賃金比較表

	内 訳	23 年 4 月分	43 年 3 月分
収入 内 訳	稼働日数	23	23+有給2
	持単価	10222	1,35200
	定額給	81776	24,88600
	請負給	3,59635	17,45700
	家族手当	15000	80000
	超過労働	4600	3,29600
		17	9,75600
	深夜手当	4917	3,02300
	有給休暇		3,99200
	北海道手当		2,06000
	精勤手当		1,50500
	その他	67170	00
	賃金合計	5,19598	66,77500
控 除 額	所得税	1,07100	1,42000
	健保料	3840	1,37800
	厚生年金	3780	1,74200
	失業保険	4428	46700
	生協差継		12,74000
	薬価・肴料	16800	31700
	組合費	5100	6,18500
	生命保険	26	00
	その他	1,75024	26100
	控除合計	3,16098	24,51000
	差引支払額	2,03500	42,26500

(4) 医療

昭和13年3月29日木造平屋建130坪で現在地に平和診療所として設置された。23年10月26日に平和砒病院と改称して病床20床を設置し、暖房を設備し、約304坪の大きさである。

45年1月20日病床を2床にふやし従業員、家族の医療施設の中心として大いに利用されている。

当時の診療科の内訳は次の通り。

内科、外科、眼科、耳鼻咽喉科、歯科、放射線科の6診療科で、医師2名、看護婦13名、薬剤師1名助手2名、歯科技工師1名、レントゲン技師1名、衛生管理1名、事務7名、その他6名 合計34名、この他に外科医師の応援は札幌医大、歯科は北大から応援にきていた。

救急車は41年6月に配置され活躍した。

入院患者の給食は49年の春から夕張炭砒病院から供給されるようになった。

平和炭砒が50年5月末で採炭を中止した時点で、診療体制が縮小して平和砒診療所となり人員は一部夕張炭砒病院と清陵町診療所に配転した。そして、入院患者は夕張炭砒病院に転院した。

平和砒病院の体制で処置できない重病患者やケガ人は、夕張炭砒病院や北大病院、札幌医大病院、登別国立病院、登別厚生年金病院、美唄労災病院(昭和35年5月設立)……等に移した。

この他若菜地区に、市村医院、柳瀬医院、黒川医院、有浦歯科医院、斉藤歯科医院、照井歯科医院が開業していたが、閉山の頃はわずか柳瀬、黒川の2院となってしまった。

夕張炭砒病院は明治24年開業医嘱託の診療所として発足したが、その後、社設のものとなり、選炭機向側から現在地に移転して大改増を加え、北炭および夕張市の中心病院としての役割を果たしてきた。特に46年7月に着工し、49年1年に完成した工事によって近代的な大病院に風格をもつことになり夕張市民の需要に応えた。

現在の診療所は、内科、外科、整形外科、小児科、産婦人科、眼科、歯科、耳鼻咽喉科、ヒフ科、放射線科、マッサージ科の他細菌試験室、化学試験室をもち、医師13名、薬剤師8名、看護婦96名、歯科技工師1名、放射線技師4名、細菌検査技師2名、衛生管理2名、マッサージ師、栄養師各1名、事務32名、賄婦14名、救急車1台運転手2名、雑役15名で入院ベッド328床、1日の外来患者約800名である。

だが、炭砒地帯の医者不足は深刻で、労使交渉でも健保組合でも真剣に討議されたが、解消する方途がなく社会問題化しつつある。平和砒病院でも40年代から北大、医大から応援を求めて急場をしのいできた（最後の平和砒病院長広瀬達蔵氏）。

健康保険法が大正15年に施行されると共に内務大臣の健康保険組合設立命令を受け、申請して15年12月24日設立認可をうけた。

平和砒も開坑と共に北炭健康保険組合に加盟した。設立以来数回にわたって改正され現在に至っている。

特に赤字の傾向が始った時（昭和30年頃）、北炭労連が健保対策委員会を設置して互選側議員を労組専従役員から出す事によって改革したが、炭界の不況が深刻化するにつれて炭砒健保は慢性的赤字状態をつづけ大きな社会問題化になった。49年1月現在の平和事務所の組合員数は1,825名（職員・新鉱含む）である。

(5) 冠婚・葬祭

明治24年頃夕張神社は斜坑の上に九尺角の拝殿を建立したのが夕張神社の創立由来で、その後事故などが絶えないため、神社の方角が鬼門に当たると称して明治27年4月に現在地に遷座し、大山祇命、大国主命、茅野姫命の三柱を祀って例年5月11日より3日間山神祭を盛大に行なっている。この祭典が北炭や夕張市の最大の祭で、御輿が青年部の肩にかつがれて部落を渡御し、各部落の入口には神社のノボリがたてられ、軒先には花が飾られ、子供樽御輿なども出て盛大なものとなっている。神社は炭鉱村の人々を結びつける絆の役割を果たし、炭鉱共同体の信仰の中心となっている。

炭砒はこの祭りの間3日間を特殊休日として休業する。

若鍋砒時代は共栄会館の近くにあったのが焼けて線路の山側に移り（18頁参照）、神社は若鍋砒の閉山にともなって昭和5年平和1区浴場付近に移転した。

平和砒の開坑と共に現在地に移転し、新築した最初の祭典は13年5月で平和砒神社と呼んでいる。

21年5月に平和神社として正式に認可され創立が承認された。24年8月に平和砦のみでなく若菜地区全体の守護神として氏子を拡大するために若菜神社と改称し、50年3月19日閉山にもなつて夕張神社に御神霊を奉遷した。

この間21年11月から柏木宮司、37年6月から夕張神社の本間宮司が兼務して祭祀を取り行なつてきた。

(6) 平和砦坑口神社

開坑当時は小さな神棚風のものを人道斜坑入口脇につくつて安全を祈願し、その後現在地に立派な坑口神社が建立された。旧繰込所前広場の山腹にあったので戦時中は軍隊式で毎日参拝され、時には軍事教練や花見の宴にも境内が利用される事もあった。戦時中はともかく戦後も閉山まで毎月1日を例祭にきめ、労使の代表等が参加して坑口神社安全祈願祭を開催した（毎月やっているのは平和砦だけとの事）。

このほか山神祭前日の例大祭・大祓祭（12月31日）・元旦祭（1月1日）が盛大に開催されている、しかし、50年7月26日に遷座祭を行なつて御神体は夕張神社に奉遷し、建物は夕張炭砦資料館に寄贈した。

禅峯寺は若鍋炭砦大爆発の後、寺の沢入口付近（18頁参照）にて曹洞宗の布教を開始し（大正5年）、同8年に説教所の認可をうけた。夏目住職が同14年に実相寺を継いだため、安藤住職が後を継ぎ昭和19年に現在地に移転し、22年に寺号公称された。

平和砦開坑以来の殉職者の冥福を祈つて毎年8月の盂蘭盆には合同追弔法要が行なわれ、遺族や労使の代表が参加して焼香する。真宗寺は若鍋砦閉山で昭和7年に廃寺し、平和砦開坑によって13年入江住職が再建し、18年に現在地（小野寺の沢）に移転し26年に寺号公称された。

首なし地藏さんと言われた国鉄トンネル入口の地藏堂は大正11年に岡塚重雄が、トンネル内で死亡した兄とみんなの冥福を祈るために建立したもので、後で平和砦見張付近にあった地藏さんと川に流れてきた地藏さんを合せて祀ったものといわれている。

(7) 葬儀

葬儀の場合は、ほぼ生活刷新要項にもとづいて運営されていたが、手伝人をめぐってもめる場合があるので、労使交渉で次のように取り決めた。

鉾葬の場合は18名とし職場と地区を半数ずつとする。私傷および家族葬儀の場合は地区2名、職場2名とする。いずれも本人給で出炭奨励給は坑外Bとなっている。

(8) 結婚式

24年頃までは昔のままで、新婦側にムコ入り振舞の宴をやり、新郎側は披露宴をやる方式が一般的になっている。25年に主婦会の大会で生活簡素化運動が提唱されてから遂次この運動にもとづいて合同披露宴の方式にかわつてきた。会社の施設（集会所・会館等）を利用する時は必ず生活刷新要綱によることになっていたから大いに普及した。

42年青年婦人部が結成されてからは徐々に実行委員会による結婚祝賀会方式が採用されるようになり、市民会館、おかむら等会社の施設以外の会場を利用するようになったので会費も

4,000 円程度になったが、この方式が一般的になり今日に至っている。

六、閉山で新鉱移行

9.22 協定にもとづいて、平和炭鉱からの先行者について数回にわたる団体交渉の結果、最終的に石堀進 20 名 支柱 12 名 開さく運搬 4 名 切羽運搬 5 名 ガス工作 6 名 保安（日役支柱）3 名 合計 50 名の職名が決り、人選について、学使協議の上指名し、本人の了解を得て正式に決定し、夕張一鉱からの 220 名と共に新鉱への入山式を 10 月 18 日午前 8 時より清水沢体育館で行ない、当日は、入山式終了後、坑外施設と個人別のロッカー、安全灯の配番を行なった（繰込は沼の沢地区）。

1、夕鉄労組との共闘

炭鉱鉄道は炭鉱開発の必要から設置され、閉山とともに廃止されるという特殊な関係にあったが、閉山交付金などの対象になっていなかった。

総評や私鉄線連や炭労の共闘の中で、閉山前に企業合併していれば炭鉱扱いにするとの大臣回答をうけた。

平和の閉山協定がきまり、閉山日が明らかになったことにより、夕鉄労組との共闘を進めた結果、49 年 4 月 1 日以降平和炭鉱と合併し、平和炭鉱の全員解雇と共に 50 年 3 月末をもって、全線廃止となり、50 年の歴史の幕をおろした。尚さようなら記念として記念切手（300 円）を発売した。

開通以来の旅客は 60,807,170 人、貨物は 48,053,760 トンであった。

2、組、下請労働者の条件闘争

当時平和鉱の下請は、坑内北新、北斗、新高、倉田、小宮で 100 名 坑外北新、北島工業、北寿産業、遠藤工業、富谷工業、和光建材、寺島組、横山運送、日進通運で 145 名である。平和炭鉱労働組合はこれら請負、組夫の退職金を含む閉山闘争を進め、次の確認書を会社と締結した。

「 確 認 書

北海道炭鉱汽船株式会社平和炭鉱と日本炭鉱労働組合平和支部とは昭和 48 年 9 月 22 日付会社・炭労・労連間の覚に基づき平和炭鉱閉山に伴う請負組夫の条件に関し、左記の通り確認する。

記

一、閉山特別一時金

1、支給額

イ坑内	昭和 49 年 3 月迄の採用者	有扶	261,000 円
		単身	150,000 円
	昭和 49 年 4 月～8 月採用者	有扶	130,500 円

	单身	75,000 円
口坑外 昭和 49 年 3 月迄の採用者	男子	61,000 円
	女子	20,000 円
昭和 49 年 4 月～8 月採用者	男子	30,500 円
	女子	10,000 円

2, 支給対象者 昭和 49 年 8 月末に在籍し引き続き閉山時迄稼働した者に対し前記区分により支給する。

但し、期間の途中で会社都合により他に配転した者を含む。

3, 支給時間 閉山時以降、原則として直轄鉱員・準備員と同時期に支給するよう努力する。

二、福利厚生施設の利用 現在貸与中の住宅は、原則として閉山後 6 ヶ月間従前と同一条件で貸与する。

但し、住宅集約等の必要が生じた場合は、別途協議する。

三、炭鉱離職者臨時措置法の適用 会社は関係官庁と連絡をとり、法の定めにより該当者に適用させるよう請負業者を指導する。

四、平和炭鉱閉山に伴う請負組夫の条件に関しては、本取扱いを以て問題が解決したことを了解し、組合の責任により組夫が今後一切の要求を会社に対し行なわないことを確約する。

昭和 49 年 11 月 15 日

北海道炭鉱汽船株式会社平和炭鉱

炭 鉱 長 神 野 哲 一

日本炭鉱労働組合平和支部

執行委員長 渡 辺 喜 作」

3, 新鉱構想の提案

昭和 50 年に営業出炭を開始した夕張新鉱は平和炭鉱の閉山により直轄鉱夫に下請、組夫を受け入れ、5,000 トン体制へ本格的に展開する条件を満たすのである。

その際、夕張新鉱の全体像がその骨格構造を中心にして次のように提示された。

次の図-1 は夕張新鉱の骨格構造であり、第一立坑と第二立坑の中央方式で通気システムを確立している。しかも、骨格構造は深部処女区域-700 m の深さに立坑を卸ろす日本で最初の新鉱開発方式を採用し、ガス山のペンケ背除の直下に展開するという技術の対応できない危険を犯して一挙に採炭基盤を確立しようとする。

こうした北炭社の危険と野心は立坑の位置を含め骨格構造のミスマッチを生み、さらに次頁の図-2 の採炭での重機械化の採用に現われる。

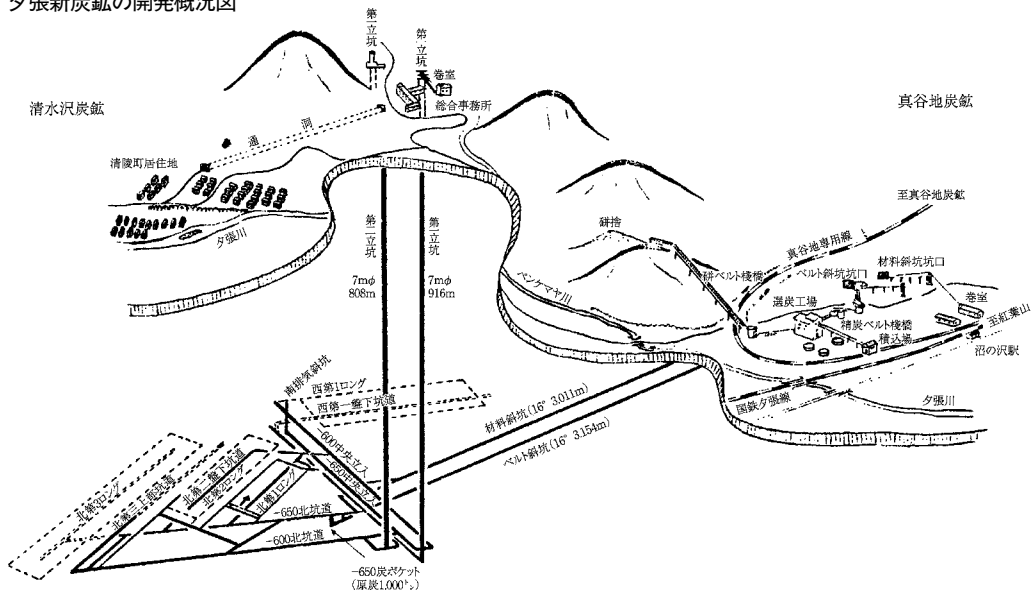
深部の、しかも断層の多い、さらに褶曲の激しい主要採炭区域には太平洋炭鉱を上廻る重装機械化で大量出炭の 5,000 トン体制を確立する合理化体制で臨み、自走枠とダブルレンジングドラムカッターが最初から導入され、1 人月当り 100 トンの出炭を計画する。

こうした無理な採炭方式と急速掘進とは異常な災害率の多発とガス突出、天盤崩落を次々に生じる原因となり、夕張新鉱の経営破綻をビルト・インすることになる。次に夕張新鉱の開発計画をその全体像として掲げる。次の図-1 は夕張新鉱の骨格構造である。

三井鉱山の技術者が夕張新鉱を診断するが、その際、採炭の重機械化に疑問を感じ、単柱式

「 夕張新鉱の開発計画

夕張新炭鉱の開発概況図



主 要 坑 道 概 要

坑 道 名	坑道長(m)	坑口レベル(SL)	坑口レベル(SL)	加 背	傾 斜	用 途
第 一 立 坑	916	SL+215	SL-701	7 mφ	90°	入気, 人員昇降
第 二 立 坑	808	SL+225	SL-583	7 mφ	90°	排 気 専 用
ベ ル ト 斜 坑	3154	SL+175	SL-693	C 54	-16°	揚 炭, 入 気
材 料 斜 坑	3011	SL+175	SL-650	C 54	-16°	材料搬入, 入気

掘進および支柱

掘進用積込機は、岩石、沿層坑道とも主としてサイドダンプローダを使用している。坑内には-600 m レベル、-650 m レベルとも研専用ポケットおよび研クラッシャ設備を設けてベルトコンベヤによる研搬出を行ない、掘進能率の向上を計っている。

坑道支保はすべて鋼柱であるが、深部稼行炭鉱としての地圧の増大に対処するため、柱間の短縮、鋼柱の大型化を計り、坑内の環境改善につとめている。

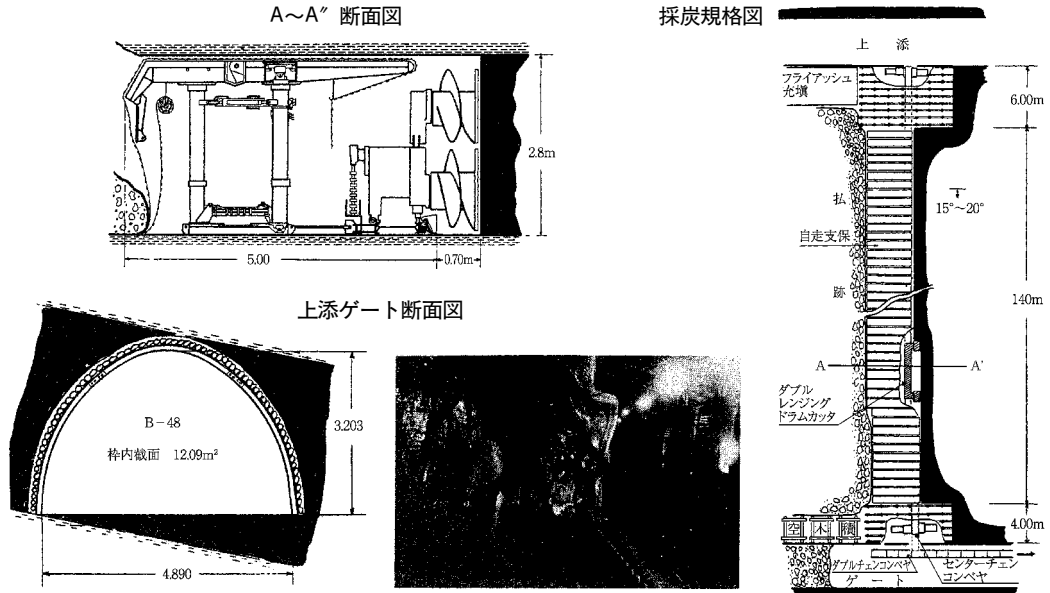
支 柱 規 格

柱種	寸 法		柱内断面 (m ²)	掘さく断面 (m ²)	柱周辺長 (m)	記 事
	巾 (m)	高さ (m)				
C56	5.624	4.389	20.00	22.10	12.00	主要坑道
C54	5.484	3.642	15.55	18.97	10.50	主要坑道
B58	5.896	4.035	17.93	21.476	10.915	特殊坑道
B49	4.961	3.578	13.62	15.90	9.779	沿層坑道
B48	4.890	3.208	12.09	14.50	9.024	沿層坑道
B41	4.190	2.840	9.18	11.00	8.022	その他坑道

図-1 夕張新鉱の骨格構造

骨格の基本としては、立坑一斜坑方式を採用している。主要入気・人員の昇降を目的とした第一立坑、排気専用の第二立坑に対して揚炭ベルト斜坑、および材料斜坑を結合して基本骨格とし、これより-600 m、-650 m レベルに水平坑道を入れて展開する。-650 m レベルを入気・運搬水準、-600 m レベルを排気として中央部より採掘区域を南北両ブロックに分けて採掘する。各片盤の採掘は本・連2本の盤下坑道から区画立入を入れて着炭させる。

-650 m 以深については、南北各ブロックごとに盤下の斜坑を卸し、垂直片盤間隔 50~60 m で水平展開し、各片盤の採掘を行なう。



切羽設備

自走支保			ドラムカッター		センタチェーンコンベヤ		ロイマ		コールブレイカ	
仕様	ヘムシャイト枠	シールド枠	仕様	仕様	仕様	仕様	仕様	仕様	仕様	仕様
型式	DK-100 840 FID	MKS P SC40 CRK1	型式	MCLE370 DR 8232 9M	型式	EKF-3	型式	ER-4-S	型式	SB-63
建付荷重	63 t	28.6 t	原動機	200 KW	原動機	110 KW×2	原動機	42 KW×2	原動機	60 KW
降縮荷重	97 t	60.0 t	ドラム回転数	50 RPM	トラフ巾	732 m/m	本体	ロイムシュ5ケ	本体	巾1.8m×長3.0m
最伸長	3410 m/m	3000 m/m	ドラム径	1600 m/m	運搬容量	600 t/h	チェーン速度	37 m/min	破砕能力	400~600 m³/h
最縮長	1810 m/m	2045 m/m	有効切込長	700 m/m	チェーン速度	55 m/min			破砕回転数	470 RPM
カッペ長	4550 m/m	3500 m/m	ピック型式	破砕型					重量	5 t
シフターストローク	1100 m/m	750 m/m	ドラム上下角度	89°(+60°, -20°)						
シフター押力	4.4 t	10.0 t								
全重量	8.2 t	8.0 t								

運搬

揚炭は、全坑ベルトコンベヤシステムを採用している。

片盤運搬は、チェーンコンベヤおよびエクステンションベルトコンベヤの組合せで、これから立入一盤下坑道のベルトコンベヤ、-650 m レベル水平坑道のベルトコンベヤを経て、-650 m 坑内炭ポケット（容量原炭 1000 t）に集められ、ここからベルト斜坑で揚炭される。

ベルト斜坑の揚炭能力は、原炭 780 t/h である。なお、主要水平坑道の研、材料の運搬は、バッテリーロコを使用している。

主要運搬設備

種別	設置箇所	原動機 (KW×台)	傾斜 (°)	ベルト巾 (m/m)	布張長 (m)	速度 (m/分)	運搬能力 (t/h)	備考
石炭運搬	ベルト斜坑 No.1	450×3	16°	960	1580	165	780	スチールコードベルト
	〃 No.2	500×3	16°	960	1605	165	780	〃
	-650 北坑道	45×2	0°	1050	405	130	930	
	-650 中央第一立入	110×2	0°	1200	650	130	1400	
	盤下坑道	45×2	0~16°	900	380	130	670	
鉱車運搬	材料斜坑	700 KW 複胴	16°		3010	240	72	
人車	ベルト斜坑	700 KW 複胴	16°		2770	240	6 輛×100 人/回	緊急用
	第一立坑	570 KW ケーベ	90°		893	720	2 段ゲージ 60 人/回	

図-2 タ張新鉱の機械化採炭方式自走支保・ダブルレンジングドラムカッター

採炭切羽は、盤下一立入方式による片盤向長壁式後退払とし、面長は約 100 m~150 m である。

切羽設備は、自走支保、ダブルレンジングドラムカッターおよびグライロードの組合せとし、いずれも最新鋭の機械設備を採用し能率の向上に努めている。なお、炭層はいずれも厚層であるのでスライシング採炭を行なう。切羽支保として、上段用支保に西独ヘムシャイト社のフレーム枠、下段用支保としては、三作製シールド枠を導入することになっている。」

とカッターの組み合わせの採炭機械化を提案するのであるが、無理な重装自走杵・ダブルドラム・カッターの導入を批判する。

七、む す び

平和砦の前身である若鍋砦から平和砦の閉山に至るまでの大要について述べてきたが、次の平和労組解散記念誌のプロローグ『平和よ永遠に』（住谷九郎作）ある通り、平和炭鉱が政策と災害に弱い炭鉱であることがあまりにもはっきりしている事が窺える。

山圧の強さとガスの多さを克服できないため閉山した若菜辺砦が、戦争気分の盛上った昭和11年に開発が計画され12月には平和炭鉱として開坑の運びになっている。

石炭鉱業は戦時中の無理な採炭計画で坑内が荒れ放題となり、戦後の経済復興のにない手として鉄鋼と共に手厚い保護をうけて発展してきた。平和炭鉱は43年の坑内火災を契機に諸条件が悪化し、北炭全体の危機克服の切札として開坑された夕張新鉱移行のために50年3月閉山されることとなる。

又、石炭鉱業は自然条件に大きく左右される産業でもある。特に夕張地区のように断層や褶曲のはげしい所では、地圧、ガス、地熱（100^{メートル}米深くなると3℃あがる）の変動が大きいことも知られている。

地圧は坑道維持に大きく作用する。平和砦でマイナス100米までの坑道は非常に安定しているがそれを越える深部になると地圧、山圧、盤膨れのため坑道補修に大幅な比重がかかり、マイナス300^{メートル}米位になると、前述のように石炭や石が飛出す災害がおこっている。ガスも地層によって抜け易いところと抜け難いところがあり深部になる程多くなる傾向がある。温度も深くなるにつれて高温（32°）になり風量の増加や肉体的負担も当然大きくなってくる。

それに傾斜や天盤が下盤の強弱によって機械化に大きな変化を与える。急傾斜では機械化はほとんどできずせいぜい発破採炭となる。緩傾斜では鉄柱、カッペや自走杵、ドラムカッターなどの大型機械化が導入される。しかし天盤情況が悪いといったん天盤をゆるめる自走杵の使用は非常に能率を落^{おと}すこととなる（平和炭での使用はその例であった）。

このように自然条件の影響を受け易く深部に移行する程稼行条件は悪化した。

平和砦二区のマイナス100^{メートル}米までの採炭条件は非常に良く北海道で最高の能率をあげ「平和に追つけ、追越せ」のことが生れたのは正にこの時であった。しかし、平和炭鉱は深部に移行し「新標作」が採用された46年頃に最も悪くなった時で全砦標作の改定をめぐって3日間の山元ストライキを決行したのも予定通り出炭ができない結果に由るのであった。

技術は自然条件を熟知した上でそれに合ったもの、それを克服するために必要な手段なのである。平和選炭機で開発された「空気作動式自動研破碎装置」がやがて全国の選炭機に普及したことは平和炭鉱の技術者の快挙であった。

最初の頃は山毎に相当の自主制（予算、技術、行事などすべてに）があったので人間関係の

確立にもいろいろな試みが採用されていたが、だんだん鉱業所毎に統一されたり、全社的に統一されていったため、ヤマの自主性がなくなり労使関係に影響がでるようになった。他方、二砦の開坑で角田、穂別、真谷地、登川からも鉱員を移行させ、その後も万字、新夕張の移行によって従業員の構成は混成チームとなり、対立を深めることもあった。

このため、労務政策上も地域や職場でも大変な配慮が必要であった。

こうした結果は労働組合の運営や役員選挙に影響があった。これが1対5の対立選挙が長く尾を引く結果となり、ピラやハガキ事件を引起す結果にも現われている。

機関運営でも反対派の執行部に灰皿が投げつけられたり、呼出しての暴力行為もあったという。このような混成チームが閉山時に炭労最高の閉山条件で解決するまでに立ち直ったのは、組合の職場や地域、青年婦人などの組織づくりを真剣に進めた結果であろう。

この尊い経験はやがて移行した夕張新鉱で幾多の困難に敢然と立ち向っていく指導体制を確立することになった。又現在も多くの分野で立派な活躍をつづけている活動家を育てる結果になったのである。

ヤマの運命をきめるもう一つの条件に地質や炭層条件の把握がある。そのためのボーリングはガス対策とともに最も重要なものである。もし「石炭合理化臨時措置法」にもとづく諸対策がなく、企業が自らの努力で平和鉱を存続させるとするならば、北西部から鹿の谷方向への移行のために事前にボーリングによる炭層調査をやっていたら、マイナス100^{メートル}米からわずかに150^{メートル}米^{メートル}落込みの炭層移行の斜坑開さくによって充分対策がたてられたはずである。

古いヤマを閉山交付金で買上げてもらい、新鉱開発を政府資金導入によってできるという環境のもとで前述の計画が簡単にくずれたことは、新鉱の結果から考えて果して得策であったかどうかのギモンが残るという技術者もいたことをここに敢えて付言しておこう。次に平和炭鉱の歴史的意義と軌跡を掲げ、結論とする。

プロローグ

平和よ永遠に

うつ蒼たる原始林 熊笹におおわれた冷水山

熊や鹿の通り道だったワツカナムベツ（川）流域で

明治32年 北海道庁地理調査班が石炭を発見した

明治39年5月 谷新夕張炭山若鍋砦として開坑

同年10月石狩石炭株式会社が経営を継承した

大正3年11月28日午後3時15分 大爆発が起き

ヤマの約半数が（423名死亡）死傷する大惨事となった

経営の流れは変り 東京ガス 三井鉱山を経て

大正9年1月 北炭に吸収合併された

砒名も若菜辺砒・八坂・琴平・住吉・平安坑とかえ
神に祈る気持の新砒（坑）名も
相つぐ爆発（17回）と ガスの処理ができず
不況の波をまともに受けて 昭和5年7月1日
天下にとどろく悪印象を残して廃坑となった
閉山跡は ゴーストタウン（廃墟）と化した

満州事変後の政府は 侵略戦争への歩みを強め
拡大予算と軍需産業 石炭の大増産を要求した
要望を受けた北炭は 若菜辺砒の再開を計画した
新しいイメージで 人集めも可能な砒名をと
事故が無く 静かで 平穏なヤマを願う切なる心は
平和砒と命名して昭和12年1月開坑に着手した
国をあげて聖戦を叫び狂っている時に
地名も地層もなく 開坑前（前年）の命名は異例だった
人々の願いは強く 半年おくれたらこの名はなかったろう
稀にみる良質炭と多量のガスは 開発途上の石坑道でも
ガス爆発を起こした 戦争の拡大は坑内を荒廃させた
鉱夫の半分はかり出された朝鮮人労働者と勤報隊だった

終戦で 夕張最初の平和労働組合を結成し
食糧確保に生活向上に斗った 働く者はたたかった
第二砒が開坑し ガス抜き スライシング 選炭 能率は
他山から「平和に追いつき 追い越せ」の目標にされた
43年7月30日 32名が殉職する大災害が発生した
災害契機に準備はおくれ 深部移行で条件は悪化した
政府のスクラップ政策で 閉山の嵐は全国に荒狂っていた
45年5月 突然 平和砒の閉山が提案された
労働組合は完全雇傭と条件向上めざして斗った そして
全員新鉱移行と炭労傘下最高の条件を勝ちとった
災害が契機となり 石炭政策で閉山となった運命は
あまりにも若菜辺砒と似て 痛恨きわまりない
地底から叫ぶ 多くの仲間の冥福を祈り
この教訓を生かして 新しいヤマを守り抜こう
平和砒よ 平和炭鉱労働組合よ この素晴らしい名前を
深く胸に刻んで生きつづけよう 平和よ永遠に……